

東京大学のサッカー

闘魂90^{年の軌跡}

第4部 資料編



東大

定期戦の足取り

京大

戦後すぐ復活して連綿と

大正末に中止、協力態勢は続く

まず東京大学と京都大学そのものの歴史を簡単に見ておきたい。

東京大学は1877年（明治10年）に誕生した。1886年（明治19年）に帝国大学を名乗り、1897年（明治30年）に東京帝国大学と名称を改めた。戦後1947年（昭和22年）に東京大学となり、1949年（昭和24年）の学制改革によって新制の東京大学となった。

一方、京都大学は1897年（明治30年）に京都帝国大学として誕生する。上記の東京帝国大学への改名は、東京と京都に2つの帝大ができたためである。以後の名称変更、および新制への制度変更は、東大と同様である。

その後、1907年（明治40年）に東北帝国大学が、さらに昭和初頭に掛けて九州、京城、台北、大阪、名古屋の順で帝国大学が誕生したが、その歴史的経緯から見ても、東京と京都が現在に至るまで、学術・研究・教育を始めいろいろな面でよき「ライバル」であり続けているのは当然といってもよいだろう。スポーツの面でも、サッカーでもまったく同様で、戦前の中断期はあったが、定期戦がよき「ライバル関係」を象徴するものであり、両校サッカー部の歴史の重要な部分であったことは間違いのない事実である。

ここでは、東大ア式蹴球部誌「闘魂」1～5号、「京都大学蹴球部五十年史」、「第30回東大・京大サッカー定期戦記念プログラム」、「第59回東京大学－京都大学定期戦プログラム」と朝日新聞、アサヒ・スポーツ、東京帝国大学新聞（以下帝大新聞）、運動界の記事から、両大学のサッカー定期戦のこれまでを振り返ってみたい。

〇●大正14年に京都で初の試合

本誌では東大サッカーの起源を1918年（大正7年）としているが、ア式蹴球部として大学で正式に認知されたのは、それより遅れて1921年か1922

年のことと思われる。これに対して京大の方は、部の設立が1925年（大正14年）とはっきりしている。この設立に東京大学ア式蹴球部のかかわりがあったのである。

大正12年から東大ア式蹴球部が主催して始められた全国高等学校蹴球選手権大会で、同じチームで、あるいは対戦相手として戦った選手たちが、東大、京大に分かれて進学し、すでにサッカー部のあった東大の選手が仲間の京大生に働きかけて、部を創設する動きが始まった。

当時京大のラグビー部は全国でも優勝する強さを誇っていたから、同じ蹴球を名乗り、グラウンドも共有しなければならなくなるサッカー部の設立には難色を示していた。そうした状況の中で1925年（大正14年）4月に東大が京都に遠征して試合をしたのが、東大と京大のサッカーの試合の始めである。

この試合は2－1で京大が勝利した。東大はその前年関東リーグで2位となっていたから、その東大に勝ったということで、部の設立に対する反対も弱まり、その年に承認されている。

〇●両校が全校あげ対抗競技会

その前年から東大と京大の両学友会（運動部と文化部とが一緒になった組織。東大もこの時期は運動会もこの組織に吸収されていたが、数年後に分離して運動会に戻った。京大も現在は体育会となっているが当時は学友会だった。）が話し合っ、それまで種目ごとに行っていた両大学の対抗戦を、総合的な対抗競技会として開催することに合意し、1924年（大正13年）その第1回が京都で開かれた。このときは京大にサッカー部はまだなく、この対抗戦の種目とはならなかった。

1925年（大正14年）の秋に計画された第2回東西両大学運動週間という名称のこの総合対抗競技会には、サッカーも10種目のスポーツの中に加え

られ、スポーツ以外にも、文科系の弁論、音楽、合同造形美術も参加した。全種目では300名余の京大生が東征したと帝大新聞に書かれている。会期は10月16日～19日の4日間であった。

サッカーは18日午後3時22分から高師運動場で行われた。古在東大総長をはじめ多くの観客が集まったようで、「人波打って」と帝大新聞の記事にある。京大は香川、金、東大は中島、竹腰が攻撃の中心だったようで、記事中にしばしばこの名前が登場する。またゴール前に攻め込むという意味だと思われるが、圧迫という言葉がこの当時の新聞記事にはしばしば見られる。この試合も、両軍が圧迫しあったようである。試合は前半9分に京大LW黄が相手バックのミスについてドリブル



タイムアップ寸前、劇的な点が入り、3－2で東大が勝つ
＝平成20年8月3日、京大グラウンドで

で前進し、センターに送ったボールを香川が見事に決めて先制すれば、東大はそのキックオフから見事なコンビネーションで進み、中島のシュートがバーから跳ね返るのを野島がすかさず決めて同点とした。

以後も激しい攻防が続き、前日の雨のせいでぬかるんだグラウンド状態だったこともあり、かなり壮絶な肉弾戦となった。金が前半の終わりごろ、タックルによる転倒で頭を強打して負傷退場し、後半には中島が額を割って出血するなど、帝大新聞の見出しにも「両軍傷者続出し、凄愴の気場に満つ」とあるような壮絶な攻防の後、引き分けに終わった。

○●新ルールの扱いこじれ中止

1926年（大正15年）の京大戦は、前年同様に第3回東西両大学対抗の運動週間の中で行われ、サ

ッカーは10月18日に京大グラウンドで行われることになっていた。このため前年は代表となった明治神宮大会の関東予選には2軍チームを送り、俊英をすぐった1軍はこの試合に備えて、300余名の他部の選手たちとともに15日に上洛していた。

しかし交渉の手違いから、急に中止せざるを得なくなった。問題の起こりは京大総務部と東大中央部との交渉の際に、両チームの試合についての主張の違いが明らかになったことにある。争点の第1は東大が正規の90分の試合を主張したのに対して、京大は昨年とおりの60分を主張したこと、第2点は改正されたオフサイドルールの適用についての双方の対立であった。また前年の試合が荒れた試合となって、負傷者が何人か出たことも話がこじれる要因になったようである。

オフサイドについては、帝大新聞には東大が旧ルールを、京大は新ルールの採用を主張したとあるが、東大－京大戦30回記念プログラムに掲載されている中島道雄氏（東大OB、当時の主将）の文章ではその主張が逆になっている。運動界の前年のリーグ戦の記事で、関東では早慶戦で新ルールのテストが行われたことが書かれており、関東リーグではこの年から新ルールを採用することになっていたし、京大50年史の佐藤巍の記事にも関東はすでに採用し、関西は来年度からとあることから、帝大新聞の記事が誤りであろう。交渉に直接当

たったであろう中島の文章からも、東大が新ルールを主張したという方がもっともだと思われる。ちなみにこの新ルールとは、1925年にオフサイドが3人より前方だったものが2人より前方というように改正されたもので、戦術的にも大きな変化をもたらした改正であった。

東大はこのことを事前に書状で送付したのだが、これを京大側が受け取っていないことがこじれた要因で、総務部、中央部の斡旋で何回かの折衝が持たれ、京大がオフサイドについては東大の主張を受け入れ、試合時間についても70分と歩み寄ったが、東大は受け入れず、関東、関西両リーグの試合規程の不一致を理由に、この年の試合を中止する旨の声明を両部の名で発表するに至った。

その後、東大側が60分ゲームを受け入れることを申し入れたが、すでに京大側が合宿を解散した

ことと、その年のうちに試合を行うことも、京大グラウンドが18日以降はラグビーの専用になることから実現しなかった。

当時の両部の部長は、京大は末広重雄（兄）、東大が末広恭二（弟）でご兄弟だった。血気盛んに主張しあって譲らない学生たちに、お互い気まづい思いをされたかも知れない。

○●全国高校大会を交互に開催

1927年（昭和2年）、東大が竹腰を主将とする新チームになったとき、その年の方針を議論する部員会議で、京大との定期戦の復活も議論されたが、リーグ戦を重視するために京大戦は行わないことを決定した。これ以後、戦前に両大学が対戦したのは、両リーグの優勝チームとしての対戦（1930年12月28日）と、朝日招待（1938年1月9日）の試合があるだけで、それ以外には戦後まで東大－京大戦は行われなかった。

大学全体としても、3年間続いた東大－京大の運動週間は廃止することとなり、各部同士の対抗試合を任意に適当な時期に個別に行うことになった。

しかし、東大ア式蹴球部が主催して毎年正月に東京で行っていた全国高等学校選手権大会は、両部の協議により両大学ア式蹴球部が共催して行うことになり、1928年正月の第5回大会は東大グラウンドで、次の年は京都でと交互に開催されることになった。

選手たちもこの大会にかなりの人数が行き来して、一緒に大会運営や審判に当たっており、その際に両チームで合同練習も行っていたようである。1938年（昭和13年）1月9日に、朝日招待サッカーで両大学が対戦した時のアサヒ・スポーツ（1月15日付）の記事に「この両チームは、インターハイの間東京において呉越同舟で練習しており、お互いに相手をよく研究し、」と書かれている。けんか別れのような形で定期戦はなくなってしまったが、両大学サッカー部の交流は続いていたのである。

戦後になって定期戦が復活した。その辺の事情を、恒藤武（京大OB、昭和25年卒）が「京都大学蹴球部五十年史」に「京都大学運動学部蹴球学科卒業生の弁」と題して書かれた文の中から引用して紹介する。

「学制改革と共に昭和23年10月の農学部グラウンドに於ける第23回インターハイが最後の大会となった。インターハイの世話を京大、東大が協力してやって来たが、これでその縁もなくなる。戦前から途絶えている東大との定期戦の復活を提起する好機であると考えた。幸い東大のキャプテン馬渡君は水戸の後輩であり、連絡を取って23年夏休みに上京し話し合うことにした。東大マネージャー馬越君（六高）も加わり相談の結果、昭和24年の7月に対抗戦を復活しようということになり、京大が東京に遠征し、御殿下グラウンドで対戦することになった。部費が窮屈な時代であったから、東京の宿泊は親戚など身寄りのある者はそこへ、ない者は先輩の家や会社の寮などにお世話になり分宿した。―（中略）― その後東大側の事情で昭和25年は行われず、昭和26年より京都、東京交互に行われ今日に至っている。」

来年（2009年）には戦後復活してから60回の定期戦を迎える。その間に日本の、そして大学のサッカー環境は大きく変わった。昭和初期のように東大と京大で大学の、そしてそれはイコール日本の王座を争うというようなことは、夢としても語ることはできないが、これからもよきライバルとして、大学サッカーのあり方を示すモデルであって欲しいと願っている。それを追求する際に、先輩たちがサッカーに対してどんなに真剣な取り組みをしてきたのかを、それぞれの大学の、そしてライバルの歴史からも学び取って欲しいと願っている。

以下に戦前および戦後すぐの試合を含めて、東大－京大戦の記録を掲げておく。

（浅見俊雄）

東大ー京大定期戦の記録

【復活以前】

年	東大	京大	会場
1925 大正14年	●	1—2	京大
1925 大正14年	△	1—1	高師
1930 昭和5年	○	2—1	南甲子園 (東西大学王座決定戦)
1938 昭和13年	●	2—5	南甲子園 (朝日招待)
1948 昭和23年	○	4—0	西宮 (朝日招待・OBを含む)

【戦後復活以後】

回	年	東大	京大	会場
1	1949 昭和24年	△	1—1	東大G
	1950 昭和25年	—	—	—
2	1951 昭和26年	○	4—1	京大
3	1952 昭和27年	●	1—3	京大
4	1953 昭和28年	○	8—2	東大G
5	1954 昭和29年	○	13—0	京大
6	1955 昭和30年	○	6—0	東大N
7	1956 昭和31年	△	3—3	京大
8	1957 昭和32年	△	0—0	東大G
9	1958 昭和33年	●	3—4	京大
10	1959 昭和34年	○	4—1	東大G
11	1960 昭和35年	△	2—2	京大
12	1961 昭和36年	○	2—1	東大G
13	1962 昭和37年	●	0—1	京大
14	1963 昭和38年	△	0—0	東大G
15	1964 昭和39年	△	0—0	京大
16	1965 昭和40年	○	1—0	東大K
17	1966 昭和41年	△	1—1	京大
18	1967 昭和42年	○	3—0	東大K
19	1968 昭和43年	○	3—0	京大
20	1969 昭和44年	△	1—1	東大K
21	1970 昭和45年	○	3—2	京大
22	1971 昭和46年	△	1—1	東大G
23	1972 昭和47年	○	1—0	京大
24	1973 昭和48年	△	2—2	東大G
25	1974 昭和49年	○	1—0	京大
26	1975 昭和50年	○	2—1	東大G
27	1976 昭和51年	●	1—3	京大
28	1977 昭和52年	○	1—0	東大G

回	年	東大	京大	会場
29	1978 昭和53年	●	0—3	京大
30	1979 昭和54年	●	0—4	東大G
31	1980 昭和55年	●	1—3	京大
32	1981 昭和56年	○	2—1	東大G
33	1982 昭和57年	○	1—0	京大
34	1983 昭和58年	○	4—1	東大G
35	1984 昭和59年	○	2—0	京大
36	1985 昭和60年	○	4—2	東大K
37	1986 昭和61年	○	4—2	京大
38	1987 昭和62年	○	1—0	東大K
39	1988 昭和63年	△	0—0	京大
40	1989 平成元年	△	1—1	東大N
41	1990 平成2年	●	0—1	京大
42	1991 平成3年	△	0—0	東大N
43	1992 平成4年	△	1—1	京大
44	1993 平成5年	●	0—3	東大N
45	1994 平成6年	●	0—1	京大
46	1995 平成7年	●	3—4	東大N
47	1996 平成8年	○	1—0	京大
48	1997 平成9年	○	3—0	東大N
49	1998 平成10年	○	3—2	京大
50	1999 平成11年	○	2—1	東大K
51	2000 平成12年	○	3—2	京大
52	2001 平成13年	○	3—2	東大K
53	2002 平成14年	○	3—1	京大
54	2003 平成15年	●	0—1	東大K
55	2004 平成16年	△	0—0	京大
56	2005 平成17年	○	1—0	東大G
57	2006 平成18年	●	1—2	京大
58	2007 平成19年	△	1—1	東大G
59	2008 平成20年	○	3—2	京大

復活以後の通算成績

東京大学 30勝13敗16分

東大G 御殿下グラウンド

東大K 検見川グラウンド

東大N 農学部グラウンド

京大はすべて農学部グラウンド

日本代表

東大が生んだ監督・選手

五輪など国際試合で大活躍

大正後半から昭和前期に輩出

今、日本のサッカーのトップは完全にプロ化し、アマチュアの東大サッカー部員が全日本チームの代表に選ばれるということは、極めて困難な事と言わざるを得ない。

「三菱ダイヤモンドサッカー」でジョージ・ベストに憧れ、岡野俊一郎氏の名解説を聞き洩らすまいと耳をそばたてたのは、ずいぶん昔のことのように感じられるが、その岡野氏が東大サッカー部員最後の日の丸を付けた選手だったのである。

岡野氏が最後に全日本チームの選手として出場したのが1955年（昭和30年）、竹腰重丸氏が最後

に全日本チームの監督を務めたのが1959年（昭和34年）、ずいぶんと昔のことである。

しかしながら東大サッカー部には、1921年に野津謙氏が全日本チームの一員として出場して以来、数多くの全日本選手を輩出してきた歴史がある。

1930年の極東大会では東大サッカー部員が全日本チームの主力メンバーとして出場したこともある。90年の歴史をひも解くにあたり、その栄光の歴史をしかとしたためておきたい。

開催時期	大会名(開催地)	試合結果	出場者
1921年 5月	極東選手権大会(上海)	日本 1 - 3 フィリピン	野津謙(大12医卒、HB)
1921年 6月	極東選手権大会(上海)	日本 0 - 4 中華民国	野津謙(HB)
1925年 5月	極東選手権大会(マニラ)	日本 0 - 2 中華民国	竹腰重丸(昭3農卒、FW)
1927年 8月	極東選手権大会(上海)	日本 1 - 5 中華民国	竹腰重丸(FW)
		日本 2 - 1 フィリピン	竹腰重丸(FW)
1930年 5月	極東選手権大会(東京)	日本 7 - 2 フィリピン	竹内悌三(昭7経卒、FB)、竹腰重丸(HB)、 野澤正雄(昭7農卒、HB)、春山泰雄(昭6経卒、FW)、 若林竹雄(昭6経卒、FW)、手嶋志郎(昭7農卒、FW)、 篠島秀雄(昭6法卒、FW)、高山忠雄(昭6文卒、FW)
		日本 3 - 3 中華民国	竹内悌三、竹腰重丸、野澤正雄、春山泰雄、 若林竹雄、手嶋志郎、篠島秀雄、高山忠雄
1934年 5月	極東選手権大会(マニラ)	日本 1 - 7 蘭領東インド	竹腰重丸(監督)
		日本 4 - 3 フィリピン	竹腰重丸(監督)
		日本 3 - 4 中華民国	竹腰重丸(監督)
1936年 7月	交流試合(ベルリン)	日本 1 - 3 ワッカー	竹内悌三(FB)、種田孝一(昭13経卒、FB) 竹腰重丸(FW)、高橋豊二(昭14農卒、FW)
		日本 3 - 4 ミネルヴァ	竹内悌三(FB)、種田孝一(HB)
		日本 2 - 3 ヴラウヴァイス	竹内悌三(FB)、種田孝一(HB)、 高橋豊二(FW)
1936年			
	8月4日 オリンピック(ベルリン)	日本 3 - 2 スウェーデン	竹内悌三(FB)、種田孝一(HB)
	8月7日 オリンピック(ベルリン)	日本 0 - 8 イタリア	竹内悌三(FB)、種田孝一(HB)

開催時期	大会名(開催地)	試合結果	出場者
1936年8月	交流試合(エッセン)	日本2-6 ニューダーラインガウ州選抜	竹内悌三(FB)、種田孝一(HB)、高橋豊二(FW)
1938年4月	交流試合(東京)	日本4-0 コリンチアンズ	竹腰重丸(監督)、菊池宏(昭14農卒、FB)、種田孝一(HB)
1939年8月	交流試合(大連)	日本6-1 関東州	竹腰重丸(監督)、大山政行(昭16法卒、FB)、菊池宏(FB)、直木和(昭16法卒、FW)
9月	日満華交歓競技(新京)	日本3-0 中華民国 日本6-0 満州国	竹腰重丸(監督)、大山政行(FB)、菊池宏(FB)、直木和(FW) 竹腰重丸(監督)、大山政行(FB)、菊池宏(FB)
1940年6月	紀元2600年奉祝東亜競技大会(東京、西宮)	日本、満州国、中華民国、フィリピン	竹腰重丸(監督)、直木和(FW)
1942年8月	「満州国」建国10周年慶祝東亜競技大会(新京)日本は学生選抜を代表として派遣		
		日本6-1 中華民国	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(昭19薬卒、FB)
		日本3-1 満州国	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)
		日本12-0 蒙古	竹腰重丸(監督)、大貫雅敏(昭19文卒、FB)、奥瀬雅久(昭18経卒、HB)
8月	交流試合(京城)	日本0-5 朝鮮代表	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)、奥瀬雅久(HB)
1951年2月~3月	練習試合 対全関西、対全関西(大阪、西宮)		有馬洪(昭16薬卒、HB)
	交流試合(ニューデリー)	日本2-0 インド空軍	有馬洪(HB)
	アジア競技大会(ニューデリー)	日本0-0 イラン	有馬洪(HB)
		日本2-3 イラン	有馬洪(HB)
		日本2-0 アフガン	有馬洪(HB)、加藤信幸(HB)
	交流試合(バンコク)	日本5-1 アサンプシヨ大	加藤信幸(FB)、有馬洪(HB)
11月	交流試合(西宮)	日本0-3 ヘルシングボリ	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)、有馬洪(HB)
12月	交流試合(東京)	日本0-5 ヘルシングボリ	竹腰重丸(監督)、有馬洪(HB)
1952年6月	交流試合(東京)	日本4-3 全香港華人選抜	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)、大埜正雄(昭26経卒、HB)
		日本0-9 オッフエンバッハ・キッカーズ	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)、大埜正雄(HB)
1953年11月	交流試合(大阪)	日本1-5 ユールゴルデン	竹腰重丸(監督)、加藤信幸(FB)
	(東京)	日本1-9 ユールゴルデン	竹腰重丸(監督)、大埜正雄(HB)
1954年3月	W・C スイス予選(東京)	日本1-5 韓国	竹腰重丸(監督)
		日本2-2 韓国	竹腰重丸(監督)、大埜正雄(HB)
5月	アジア競技大会(マニラ)	日本3-5 インドネシア	竹腰重丸(監督)、大埜正雄(HB)
		日本2-3 インド	竹腰重丸(監督)、大埜正雄(HB)
1955年1月	交流試合(ラングーン)	日本1-1 ビルマ保健大臣	竹腰重丸(監督)、岡野俊一郎(昭32文卒、FW)
	以後同地で2~3日おきに交流試合を行う		
	対ビルマ体協会長チーム、アマチュア蹴球協会選抜チーム		竹腰重丸(監督)
	対体協選抜チーム、北ビルマ選抜チーム		竹腰重丸(監督)、岡野俊一郎(FW)
	バンコクで、対在タイ全華人チーム、全バンコクチーム		竹腰重丸(監督)、岡野俊一郎(FW)
1955年10月	Aマッチ(東京)	日本0-0 ビルマ	竹腰重丸(監督)
1956年6月	メルボルン五輪予選(東京)	日本2-0 韓国	竹腰重丸(監督)
		日本0-2 韓国	竹腰重丸(監督)
1956年10月	国際Bマッチ(東京)	日本3-5 米国五輪代表	竹腰重丸(監督)
11月	交流試合(メルボルン)	日本3-0 ハコクラブ	竹腰重丸(監督)
	国際Bマッチ(メルボルン)	日本2-7 ユーゴ五輪代表	竹腰重丸(監督)
	メルボルン五輪(メルボルン)	日本0-2 オーストラリア	竹腰重丸(監督)

開催時期	大会名(開催地)	試合結果	出場者
1958年12月	国際Bマッチ (香港)	日本2 - 5 香港	竹腰重丸(監督)
	国際Aマッチ (クアラルンプール)	日本2 - 6 マラヤ	竹腰重丸(監督)
1959年1月	国際Aマッチ (ベナン)	日本3 - 1 マラヤ	竹腰重丸(監督)
	(シンガポール)	日本4 - 3 シンガポール	竹腰重丸(監督)
		日本2 - 3 シンガポール	竹腰重丸(監督)
8月	ムルデカ大会	日本1 - 1 香港	竹腰重丸(監督)
	(クアラルンプール)	日本2 - 4 香港	竹腰重丸(監督)
		日本4 - 1 シンガポール	竹腰重丸(監督)
		日本0 - 0 韓国	竹腰重丸(監督)
		日本1 - 3 韓国	竹腰重丸(監督)
12月	ローマ五輪予選(東京)	日本0 - 2 韓国	竹腰重丸(監督)
		日本1 - 0 韓国	竹腰重丸(監督)
1958年12月～59年9月 交流試合			
	マラヤで南マラヤ選抜、マラヤンマラヤ、スランゴール州、ベラク州、		竹腰重丸(監督)
	香港で香港選抜、東京で在日朝鮮選抜、		竹腰重丸(監督)
	サイゴンで南ベトナム選抜(2試合)		竹腰重丸(監督)
※全日本チーム・竹腰監督の戦績			
	Aマッチ	11試合	4勝2分5敗
	全期間通算	24試合	8勝4分12敗
1969年5月	交流試合(東京)	日本2 - 1 ミドルセックスワンダラーズ	岡野俊一郎(監督代理)
		日本1 - 2 ミドルセックスワンダラーズ	岡野俊一郎(監督代理)
1970年3月	三国対抗(東京)	日本1 - 1 I F K イエテポリ	岡野俊一郎(監督)
	(東京)	日本4 - 1 日本B	岡野俊一郎(監督)
	(神戸)	日本1 - 1 フラメンゴ	岡野俊一郎(監督)
5月～6月	交流試合 サウサンプトン (イングランド) と東京、神戸、福岡で4試合		
	日本1 - 3、3 - 3 (東京)、1 - 2 (神戸)、0 - 2 (福岡)		岡野俊一郎(監督)
7月	交流試合 ボルトグルベン1903 (デンマーク) と神戸、横浜で2試合		
	日本3 - 4 (神戸)、1 - 0 (横浜)		岡野俊一郎(監督)
7月	ムルデカ大会(マレーシア)	日本1 - 2 香港	岡野俊一郎(監督)
8月		日本1 - 1 韓国	岡野俊一郎(監督)
		日本0 - 0 タイ	岡野俊一郎(監督)
		日本4 - 3 インドネシア	岡野俊一郎(監督)
		日本4 - 0 シンガポール	岡野俊一郎(監督)
		日本3 - 2 台湾	岡野俊一郎(監督)
8月～9月	交流試合 ベンフィカ (ポルトガル) と神戸、東京で3試合		
	日本0 - 3 (神戸)、日本1 - 4 (東京)、日本1 - 6 (東京)		岡野俊一郎(監督)
11月	交流試合 DIFユールゴルデン (スウェーデン) と東京、京都で4試合		
	日本1 - 6 (東京)、日本1 - 2 (京都)、日本0 - 3、日本1 - 0 (東京)		岡野俊一郎(監督)
12月	アジア大会(バンコク)	日本1 - 0 マレーシア	岡野俊一郎(監督)
		日本1 - 0 クメール	岡野俊一郎(監督)
		日本2 - 1 ビルマ	岡野俊一郎(監督)

開催時期	大会名(開催地)	試合結果	出場者	
1971年 3月	三国対抗(東京)	日本 2 - 1 インドネシア	岡野俊一郎(監督)	
		日本 1 - 0 インド	岡野俊一郎(監督)	
		準決勝 日本 1 - 2 韓国	岡野俊一郎(監督)	
		3位決定戦 日本 0 - 1 インド	岡野俊一郎(監督)	
		日本 0 - 0 セントジョージ・ブダペスト (豪)	岡野俊一郎(監督)	
		日本 1 - 0 日本B	岡野俊一郎(監督)	
		日本 1 - 2 ボルトクルベン・フレム (デンマーク)	岡野俊一郎(監督)	
5～6月交流試合	トッテナム・ホットスパー (英) と神戸、東京で3試合			
7月	交流試合(横浜)	日本 0 - 6 (神戸)、2 - 7、0 - 3 (東京)	岡野俊一郎(監督)	
		日本 2 - 1 ミドルセックス・ワンダラーズ	岡野俊一郎(監督)	
7月～8月、	西ドイツ、イングランド、デンマーク、アイスランドに遠征して7試合			
	(西ドイツ)	日本 2 - 4 ボルシア・メンヘングラッド・バッハ	岡野俊一郎(監督)	
	(西ドイツ)	日本 2 - 3 ゲルムシュタット98	岡野俊一郎(監督)	
	(コペンハーゲン)	日本 2 - 3 デンマーク (オリンピックチーム)※※	岡野俊一郎(監督)	
	(イングランド)	日本 0 - 5 ハル・シティー	岡野俊一郎(監督)	
		日本 2 - 6 サウサンプトン	岡野俊一郎(監督)	
		日本 2 - 7 グリムスビー・タウン	岡野俊一郎(監督)	
		日本 2 - 0 アイスランド	岡野俊一郎(監督)	
	9月	交流試合(東京)	日本 2 - 4 ヴィトリア・セトゥーバル (ポルトガル)	岡野俊一郎(監督)
			日本 0 - 5 ヴィトリア・セトゥーバル (ポルトガル)	岡野俊一郎(監督)
ミュンヘン五輪予選			日本 0 - 3 マレーシア	岡野俊一郎(監督)
(ソウル)			日本 8 - 1 フィリピン	岡野俊一郎(監督)
			日本 5 - 1 台湾	岡野俊一郎(監督)
10月		日本 1 - 2 韓国	岡野俊一郎(監督)	
※全日本チーム・岡野監督の戦績 Aマッチ 18試合 11勝 2分 5敗				

※ミュンヘン五輪予選を最後に東大サッカー部から全日本の監督および代表選手は選ばれていない。

※※この試合はデンマークではAマッチとされているが、日本ではBマッチとしている

(参考、引用文献 「日本サッカー史、日本代表の90年 後藤健生著」
(安達二郎)

東大出身の国際審判員

過去6人 後継者の登場を期待

F I F Aがいつから国際審判員の登録制度をとったのかは明らかではないが、戦前には日本から登録された記録はない。ベルリン・オリンピックのときに日本代表のコーチであった竹腰重丸が、F I F Aから審判員として指名されたという新聞記事があるが、実際には審判を務めることはなかった。

日本からの国際審判員の登録の記録は戦前にはなく、戦後1950年にF I F Aへの再加盟が認められたあとの1951年から登録されている。おそらく第2次大戦後に国際審判員制度が設けられたと考えるのが妥当であろう。

ここには、東大ア式蹴球部のOBで、国際審判員として活躍した人の氏名と登録年度を紹介する。

竹腰重丸（1928年卒）1951～57年（6年間）
 有馬洪（1941年卒）1958～61年（3年間）
 横山陽三（1941年卒）1958～65年（7年間）
 早川純生（1949年卒）1958～67年（9年間）
 浅見俊雄（1956年卒）1961～83年（22年間）
 高田宗昌（1959年卒）1978～80年（2年間）

このほか1960年に岡野俊一郎が浅見俊雄とともに国際審判員候補となったが、その年の10月にクラマー・コーチが初来日して、岡野が通訳兼アシスタントコーチを務めたことから、岡野はそれ以後コーチ、監督への道を歩むことになった。

これを見れば、浅見が引退した1983年以後、東大卒の国際審判員はいないし、現在も2級、1級審判員で上を目指している東大卒の審判員はいないから、当分国際審判員が出ることはないだろう。

東大のおかれた今のサッカー環境から、日本代表選手になることは不可能とはいえなくても極めて難しいことと思われるが、かつては竹腰、有馬に代表されるように、選手としてもかなりのレベルにあった人が国際審判員になった時代はとっ



左 横山、右 有馬（中央は村形）



J S Lの主審 高田



ボカジュニアーズ対日本戦の主審を務める浅見（左から2人目）。右端はマラドーナ。（1982.1.24 国立競技場）

くに終わって、現在国際レベルやJリーグで活躍している審判員は、むしろ東大と同じか、よりレベルの低いサッカー層の選手であった人たちであることが多い。

審判員の先輩として、ぜひ東大のOBからも今後トップを目指す審判員が育って欲しいと思っている。日本代表になるにはかなりの素質を持っていることが必要だが、審判員には特別な素質は必要でない。サッカーが好きで、サッカーを大切なものと思い、サッカーをよくしたい、自分を育ててくれたサッカーに対して何らかのお役に立ちたいという気持ちがあり、審判活動に割く何がしかの時間があれば、誰でもといってよいほど、ほとんどの人が2級レベルまではなれるであろう。あとは更なる向上心を持ち、少しの幸運に恵まれば国際審判員も夢ではない。東大からもこの道にチャレンジする人が出てきて欲しいという切なる願いを記した次第である。（浅見俊雄）

活躍した“身内のチーム”の横顔

代表格は「東大LB」

時代で変わった名称・構成

ここには、「闘魂」5号および朝日新聞などの記事から抜粋して、東大LB、全東大などの名称で活動した公式試合記録を収録した。昭和初期から昭和30年代初めまでの期間に、全日本選手権大会優勝3回などの輝かしい記録が残されている。以下に、東大ア式蹴球部とは別枠で、東大（帝大）という名の下に公式試合に出場して活躍した軌跡を紹介する。また、昭和30年代後半以降の東大OBチーム、および最近の50歳代・60歳代のシニア世代OBチームの活動についても簡単に紹介する。

2軍チーム・帝大アヅサ

ア式蹴球部の創部以前に公式戦に出場した「帝大蹴球団」は東大サッカーのルーツといえるチームだが、創部以降もア式蹴球部の枠の中にありながら、別のチーム名で公式試合に出場したチームがあった。

その最初が「帝大アヅサ」である。大正14年に竹腰はじめ優秀な1年生が数多く入部してきたので、3年生で前年には多くの得点をあげていた岸本英夫（後の宗教学の泰斗）が、「代表チームの運営は若いのに譲って、自分たちは別のチームをつくらう」といって編成したチームの発会式を9月18日に行い、「帝大アヅサ」と命名した。アヅサは梓弓（楠木正行の辞世の句で「行きて帰らぬ梓弓」と詠まれている）からとったという。監督も主将もおかず、「働かざるもの蹴るべからず」をモットーに掲げていた。

神宮競技大会には代表チームとは別に参加し、関東予選（10月はじめか）は1回戦で不幸にも帝大との同士討ちとなり、1－3で敗れた。そのあと、ヘーグ氏記念杯争奪戦（日本のサッカーの発展、特に日本協会の設立に多大の貢献をして、関東大震災で亡くなった英国大使館の書記官ヘーグ

氏を追悼する大会。12月27、28日）に出場して、東鉄（5－0）、独協（2－0）、豊島サッカー（棄権）に勝ち、決勝で成城に0－0から延長3回の後に1－0で勝って見事に優勝している。この大会のあと記録は残っていないから、この年限りのチームであったようである。

大正15年には「帝大RA」というチームが神宮大会関東予選に参加して、10月9日の3回戦で、WMWに0－3で敗れたという記録がある。RAもアヅサと同様の、東大サッカー部の2軍というか、代表チームとはメンバーの異なるチームだったようである。この名称のチームもこの年以外には記録がない。

帝大LB、2軍で初登場

「帝大LB」という名称が新聞記事にはじめて登場するのは、昭和6年の全日本選手権大会兼神宮競技大会に出場したチームのときで、関東予選を勝ち抜き、本大会でも勝ち進んで優勝している。LBは東大のスクールカラーのLight Blue（淡青）の略で、すでに早稲田のWMW（White Maroon White）というチームがあったから、それに倣ったのかもしれない。慶応はBRB（Blue Red Blue）だが、当時その名のチームがあったかどうかは定かではない。

このときのLBは明らかに東大の2軍チームで、メンバーの大半は1、2年生であり、出場選手のうち3名以外はOB名簿（原則として卒業時まで部員であった人が掲載されている）に名前がある。当時は高校大会に出場した優秀なメンバーが大量に入部して、50名を超えるような部員数だったから、2軍といっても全日本で優勝できるような強力なメンバーが組めたのであろう。また、当時1軍にとってはリーグ戦の優勝が最大の目標で、全日本大会は2軍に任せたとの推測で

きる。

帝大OB・東大OBの名も

次に「東大LB」が記録に登場するのは昭和10年である。全日本選手権の関東予選に出たメンバーには、OBの竹腰、竹内の名があり、あとは同年にリーグ戦に出たメンバーが多いから、このときに初めてOBと現役、それもレギュラークラスで編成したチームがLBとして出場したと思われる。しかし同年神宮大会の予選に出場した「東大LB」には、OBの名はなく、その年のリーグに出場したメンバーも少数なので、2軍的なチームと考えてよいであろう。

この当時、関東大学のOBで争われていた東京学生OBリーグ戦などのOBの試合には「帝大OB」として出場していて、LBとは称していない。

昭和12年に協会の公式戦として始まった6人制サッカーには、OBと現役レギュラーで編成した「東大LB・A」が優勝候補に挙げられていたが、決勝で新鋭の早大Aに敗れている。翌年の13年には、「東大LB」はA、B、Cの3チームで出場しているが、Aは竹腰、高山のOBと現役トップで編成した最強チームだったようで、B、Cは残りの現役のレギュラークラスで編成されている。14年のこの大会には「東大OB」「東大A」「東大B」と、現役とOBはまったく別のチームで参加していて、LBの名は見られない。15、16年は現役のみの参加で、OBチームの名はない。

昭和18年、戦争中の最後の大会となった（と思われる）関東蹴球大会には、「全東大」として参加し、決勝で全明大を破って優勝しているが、全とは付いていても東大の現役メンバーだけで編成されていた。LBを名乗らずに全東大としたのは戦時中であつたからであろう。

戦後すぐ全東大で出場

戦後の昭和21年に、ともに優勝した全日本選手権大会と東京選手権大会には、「全東大」で出場している。このときのメンバーはOBと現役の混成チームである。東京選手権の決勝で対戦した相手は、早大WMWと、このときすでに横文字を使っていた。この年の第1回国民体育大会のサッカーは、日本を東西に分けて予選を行い、「東大LB」が東日本代表となって関学と東西対抗決勝戦

を行って敗れている。

22年9月の東京選手権兼国体予選は「東大LB」で、翌年1月の朝日招待は「全東大」で出場し、23年もまったく同様の名前で両大会に出場しているが、この両年の両チームともOBを中心にして少数の現役が加わったメンバー編成だった。

東大LBの名で大活躍

24年は全日本選手権大会に「東大LB」として出場し、関東予選を勝ち抜いて本大会でも優勝を飾った。また秋の国体にも「東大LB」で出場、東京、関東の予選を勝ち抜いて代表権を得たが、この年の開催が東京であつたために、より強力なチームでという要請があつたのだろう、早慶などのOBを補強して、本大会には東京倶楽部として出場し、決勝で全大阪に敗れている。予選のメンバーはわからないが、東京倶楽部として登録した東大の7名はすべてOBだった（登録メンバーと4位までの順位以外、スコアも出場メンバーも国体の公式報告書に記載されていない）。この年度も朝日招待は「全東大」となっている。この3年とも相手も「全」の付いた関西の大学だったから、チーム名は招待側の意向なのかと思われる。

このあと、全日本選手権や国体の予選には、OBを中心として何人かの現役が加わって編成された「東大LB」で参加しており、予選で敗退した年が多いが、31年と33年の全日本選手権には関東予選を突破して本大会に出場し、31年は1回戦で敗退したものの、33年には3位となった。これが「東大LB」の全国レベルでの活躍の最後の記録となった。

若手OBで御殿下クラブ

上記以降の東大OBチームとしては「御殿下クラブ」の活動がある。

昭和38年の年末に、若手OBを集めて御殿下クラブが組織され、まず東京都クラブリーグに参加した。

クラブリーグで3年連続優勝したことが評価されて、昭和42年発足の東京都社会人リーグ1部に編入された。この年優勝して、第1回関東社会人選手権で準優勝し、入れ替え戦に勝って、関東リーグに昇格したが、関東リーグは昭和43年の1年だけで降格となり、昭和44年からは東京都リーグに出場し、昭和60年ごろまで続けられた。

平成期から2つの動き

御殿下クラブの活動が終わってから長らくOBのチームを組織しようという動きはなかったが、平成に入って二つの動きが出てきた。一つは、いわゆる超OBとしてまとまって楽しむサッカーをしようという動き、もう一つは若手のOBでチームを結成して、公式のリーグ戦に参加しようという動きである。

超OBの楽しむサッカーに関しては、平成元年の春から、旧制時代のOBがまとまって、早稲田大学および慶応義塾大学の超OBとの交流試合を行うようになった。この交流試合は、最初は年に1回であったが、平成5年からは年に2回の定期戦となった。そして、このころにメンバーは昭和36年卒（当時55歳）まで広げられ、翌年には愛知県刈谷市で始まった60歳以上の大会にも出場するようになった。

その後、超OBのチームは昭和36年卒までのメンバーのまま推移し、当然のことながら、5年後には全員が60歳以上となった。ところが年に2回対戦する早稲田、慶応のメンバーには毎年下の年次の卒業生が新たに参加してきており、おおむね50歳を超えたばかりのメンバーも参加するようになっていた。

平成10年になって、東大としても50歳代を集めてチームを編成しようということになり、約1年の準備期間を経て平成11年7月の京大戦を機に50歳代のチーム「東大LB50」（あるいは単に「LB50」）がスタートし、その年の11月から東早慶の3大学の超OB戦にも参加するようになった。

LB50の試合数は、初めは年に10試合程度であったが、3年目からはコンスタントに年に15から18試合をこなしている。また、平成14年以降は60歳以上で「東大LB60」として対外試合をするようになっている。

LB50、LB60が行っているのは、主として適宜相手チームを見付けて行う親善試合であるが、以下のような大会にも出場している。

<東大LB60チーム>

▽東早慶3大学超OB戦

毎年原則5月3日と11月3日

平成元年第1回から参加

▽刈谷スーパーエイジ大会

毎年9月か10月の2日間

平成6年第1回～第3回、第6回、

平成14年第9回以降参加

▽東京都シニア大会

毎年4月～5月

平成15年第1回から参加

▽七大学超OB戦

毎年3月 平成18年から参加

<東大LB50チーム>

▽東早慶3大学超OB戦

平成11年の秋から参加

▽七大学超OB戦

LB60の七大学超OB戦に同じ

▽古河市マスタース大会

毎年5月末の2日間

平成13年第11回から参加

（ただし平成16年は不参加）

一方、若手のOBたちは、平成6年に「チームDiego」を結成し、翌年から東京都社会人サッカーリーグに登録し、4部と3部でそれぞれ優勝して1年で通過し、平成9年から平成19年まで2部をキープ、そして遂に平成19年には2部で優勝して1部昇格を果たした。しかし残念ながら1年で2部に降格した。

（浅見俊雄、山本 修）

全日本選手権で3たび優勝

東大LBなどの試合記録

◆昭和3年度

5月17日付、朝日新聞に東京サッカークラブ連盟を組織し、5月19日からリーグ戦開始の記事掲載。
豊島クラブ、東京蹴球団、帝大OB、アストラクラブ、茗溪クラブの5チームが参加

◆昭和4年度

9月25日付、朝日新聞に全日本選手権兼神宮体育大会関東予選の組み合わせ決定の記事掲載。
第1部に帝大OB、第2部に帝大LBが参加

◆昭和5年度

▽大学OBリーグ

2月22日 神宮 帝大OB 4-1 (2-0) 文大OB
3月1日 帝大OB *-* 早大OB
3月8日 東大本郷 帝大OB 3-0 (1-0) BW (在京大使館チーム)
3月15日 帝大OB *-* 慶大OB

◆昭和6年度 (この時期の帝大LBは同好会的存在の学生第2チームであった)

▽全日本選手権 兼 神宮大会 関東予選 (9月27日~10月4日)

1回戦 帝大LB 4-0 農大YOS
2回戦 帝大LB 4-1 WMW
準決勝 帝大LB 3-2 MTR
決勝 帝大LB 5-3 東京蹴球団

▽全日本選手権大会 優勝

*月*日 神宮 1回戦 帝大LB 2-1 (2-0) 関学 =メンバーは各列左から=
FW出浦 三宅 日高 今村 赤松 HB鹿子木 木村 山田 FB山川 市川 GK塩原
*月*日 神宮 準決勝 帝大LB 2-0 (1-0) 二高ク
FW出浦 三宅 日高 今村 赤松 HB鹿子木 木村 山田 FB山川 市川 GK島崎
10月31日 神宮 決勝 帝大LB 5-1 (1-1) 興文中
FW出浦 三宅 日高 越智 赤松 HB鹿子木 木村 山田 FB山川 市川 GK塩原

▽大学OBリーグ 帝大OB 3勝1分 優勝

1月24日 東大G 帝大OB 8-0 (3-0) 早法OB
2月28日 東大G 帝大OB 棄権 BW

◆昭和7年度

▽関東大学OBリーグ

3月5日 綱町球場 帝大OB 7-2 (2-1) 早大OB
FW** 荻川 生島 稲田 阿部 HB** 乗富 竹内 FB朝生 船岡 GK東原
3月12日 綱町球場 帝大OB 8-1 (1-1) 明大OB
FW鈴木 生島 中島 細井 東原 HB荻川 竹内 坂本 FB船岡 朝生 GK奥野
3月19日 綱町球場 帝大OB 3-1 (1-1) 慶大OB
FW鈴木 生島 中島 稲田 伊藤 HB荻川 竹内 乗富 FB船岡 朝生 GK細井

◆昭和8年度

▽神宮体育大会東京予選

9月17日 東京高G 1回戦 帝大LB *-* MSA
 9月24日 東京高G 2回戦 帝大LB 5-1 (2-1) WMW

▽全日本選手権関東予選

9月30日 準決勝 帝大LB 2-7 慶応

▽大学OBリーグ

2月25日 東大G 帝大OB 1-3 (1-0) 早大OB
 FW高山 荻木 手島 三宅 伊藤 HB市川 竹腰 和田 FB船岡 朝生 GK奥野
 3月4日 東大G 帝大OB 5-0 (2-0) 法大OB
 FW乗富 中島 手島 三宅 木村 HB市川 生島 和田 FB船岡 朝生 GK東原

◆昭和9年度

▽大学OBリーグ

2月24日 東大G 1次リーグB組 帝大OB 5-0 (1-0) 文大OB
 3月3日 東大G 1次リーグB組 帝大OB 1-1 (1-0) 慶大OB
 3月10日 東大G 1次リーグB組 帝大OB 6-0 (3-0) 農大OB
 3月14日 東大G B組優勝決定戦 帝大OB 1-1 延長0-2 慶大OB

◆昭和10年度

▽全日本選手権関東予選

5月5日 代田橋 帝大LB 6-0 (2-0) 千葉医大
 5月11日 代田橋 帝大LB 1-3 (0-2) 早大
 FW徳田 稲川 竹腰 沖 小川 HB近石 大内 宮沢 FB竹内 萩原 GK川島

▽神宮体育大会関東予選

9月22日 明大G 帝大LB 2-2 (1-0) 延長0-1 (0-1) 文理大
 FW二宮 沖 野田 森 潮田 HB宮沢 稲田 森茂 FB藤田 宮本 GK高橋

▽大学OBリーグ (※ 例年2～3月に開催。昭和10年度は開催が遅れた)

※4月5日 東大G 1次リーグB組 帝大OB 2-2 (2-0) 慶大OB
 ※4月12日 東大G 1次リーグB組 帝大OB 15-1 青学OB

◆昭和11年度

▽全日本選手権関東予選

6月6日 帝大LB 1-8 帝大
 帝大OB 1-5 慶大BRB

▽大学OBリーグ 優勝

2月14日 東大G 1次リーグA組 帝大OB 11-0 (3-0) 青学OB
 FW山川 菊池 竹腰 和田 東原 HB森 竹内 山田 FB田村 萩原 GK高山
 2月21日 東大G 1次リーグA組 帝大OB 11-0 (5-0) 農大OB
 FW高山英 川原 竹腰 宮沢 高山忠 HB乗富 森 萩原 FB田村 朝生 GK奥野
 2月28日 東大G 1次リーグA組 帝大OB 14-0 (6-0) 明大OB
 FW大山 菊池 竹腰 川原 和田 HB森 高山英 山田 FB朝生 田村 GK宮沢
 3月7日 東大G 決勝 帝大OB 1-0 (1-0) 慶大OB
 FW小川 菊池 竹腰 川原 高山忠 HB森 高山英 宮沢 FB竹内 萩原 GK大村

◆昭和12年度

1月16日 東大G 帝大LB 0-4 (0-3) 関東選抜

FW松村 河西 阿部 後藤 小川 HB小林 笠原 奥田 FB高須 田村 GK佐野

▽関東大学OBリーグ 優勝 3連覇

2月27日 東大G 一次リーグB組 帝大OB 11-0 (5-0) 青学OB

3月6日 東大G 一次リーグB組 帝大OB 8-0 (3-0) 明大OB

FW菊池 竹腰 手島 小川 和田 HB生島 宮沢 山内 FB竹内 田村 GK阿倍

3月13日 東大G 決勝 帝大OB 3-0 (2-0) 慶応OB

FW小川 竹腰 手島 和田 高山忠 HB宮沢 高山英 大内 FB竹内 田村 GK大村

◆昭和13年度

▽関東6人制選手権 (青師G) 東大LB・Bチーム準優勝

4月26日 1回戦 東大LB・A 3-0 (0-1) 法大A

東大LB・C 4-1 (2-0) 農大YOS

2回戦

東大LB・A 0-1 (0-0) 文理大

東大LB・B 2-0 (0-0) 日歯

東大LB・C 1-2 (1-1) 明大B

4月30日 準々決

東大LB・B 2-0 (1-0) MTR

5月1日 準決勝

東大LB・B 1-0 (1-0) 東京蹴球団

決勝

東大LB・B 0-0 (0-0) 延長0-1 (0-1) 早大A

出場メンバー

	1回戦		2回戦			準々決勝	準決勝	決勝
	LB・A	LB・C	LB・A	LB・B	LB・C	LB・B	LB・B	LB・B
GK	岩動	吉田	岩動	小林	吉田	小林	小林	小林
BK	菊池	川西	菊池	力石	川西	力石	力石	力石
	属	築島	属	大山	築島	大山	大山	大山
FW	松村	大屋	高山	奥田	大屋	奥田	奥田	奥田
	阿部	大槻	竹腰	小立	大槻	山田	田村	田村
	直木	飯島	阿部	河西	飯島	河西	河西	河西

◆昭和14年度

▽関東6人制選手権 (青師G) 東大OBチーム 優勝

4月23日 1回戦 東大OB 3-0 (1-0) 早大B

4月25日 2回戦 東大OB 1-0 (1-0) 東蹴

4月29日 準々決 東大OB 1-0 (0-0) WMW

4月30日 準決勝 東大OB 2-0 (1-0) 東大B

決勝

東大OB 2-1 (0-0) 東大A

	1回戦	2回戦	準々決勝	準決勝		決勝	
	東大OB	東大OB	東大OB	東大OB	東大B	東大OB	東大A
GK	大村	大村	大村	大村	吉田	大村	岩動
BK	菊池宏	属	菊池宏	属	横山	属	小亀
	高山	高山英	属	菊池宏	長谷部	菊池宏	原田
FW	竹腰	高山忠	阿部	阿部	張	阿部	有泉
	阿部	竹腰	竹腰	竹腰	直木	竹腰	大槻
	松村	松村	高山英	高山	菊池武	高山英	大屋

◆昭和18年度

▽関東蹴球大会 優勝

11月28日 神宮外苑 決勝 全東大 2-0 (1-0) 全明大

FW三上 奥島 伊藤 加藤 中村 HB渡辺 須賀 奥瀬 FB木村 大貫 GK近藤

◆昭和21年度

▽関東蹴球選手権大会 兼 全日本選手権 関東予選

4月3日 東大G 準決勝 全東大 3-2 (2-1) 全慶大

4月6日 東大G 決勝 全東大 2-0 (1-0) 全早大

FW二宮 三上 遠山 本城 岡本 HB黒津 須賀 力石 FB佐藤 大貫 GK不破

▽全日本選手権大会 優勝

5月5日 東大G 決勝 全東大 6-2 (5-1) 神経大俱

FW二宮 三上 遠山 本城 岡本 HB黒津 須賀 力石 FB佐藤 大貫 GK不破

▽東京選手権 優勝

9月28日 東大G 準決勝 全東大 9-0 MTR (東京高OB)

FW二宮 三上 遠山 本城 岡本 HB有馬 横山 力石 FB竹腰 大貫 GK古泉

9月29日 東大G 決勝 全東大 1-1 (0-0) 延長0-0

再延長0-0再々延長1-0 早大WMW

FW二宮 三上 遠山 天野 岡本 HB有馬 横山 力石 FB大貫 須賀 GK不破

▽第1回国民体育大会 東日本予選

10月19日 準決勝 全東大 3-1 (1-0) 葦崎俱

▽第1回国民体育大会 準優勝 (東日本代表対西日本代表の決勝戦)

11月3日 西宮 一般決勝 東大LB 1-2 (1-2) 関学

FW天野 三上 早川 山崎 岡本 HB有馬 横山 力石 FB須賀 大貫 GK馬渡

◆昭和22年度

▽東京選手権 準優勝

9月24日 決勝 東大LB 1-2 (0-1) 早大WMW

FW三上 竹腰 阿部 天野 岡本 HB有馬 横山 黒津 FB須賀 大貫 GK近藤

▽朝日招待

1月10日 西宮 全東大 4-0 (3-0) 全京大

FW三上 早川 大谷 高橋 二宮 HB黒津 横山 松元 FB加藤 後藤 GK近藤

◆昭和23年度

▽東京選手権 兼 国体予選

9月6日 東大LB 1-2 第一生命

▽朝日招待

1月8日 西宮 全東大 1-1 (0-0) 全関大

FW早川 大埜 大谷 高橋 岡本 HB有馬 横山 黒津 FB斉藤 松元 GK近藤

▽関東大学OBリーグ 3勝1分1敗 同率2位

1月31日 東大G 東大OB 8-0 (4-0) 明大OB

2月6日 東大G 東大OB 棄権勝 立大OB

2月11日 東大G 東大OB 棄権勝 文大OB

2月20日 東大G 東大OB 2-3 (1-0) 慶大OB

2月27日 東大G 東大OB 3-3 (2-1) 早大OB

◆昭和24年度

▽全日本選手権関東予選

5月28日 東大G 東大LB 1-0 セントポール

5月28日 東大G 準決勝 東大LB 2-1 早大

5月29日 東伏見 決勝 東大LB 2-1 (1-1) WMW

▽全日本選手権大会（復活第1回）優勝

6月4日 東伏見 準決勝 東大LB 7－1 東洋工業

6月5日 東伏見 決勝 東大LB 5－2（3－0）関大ク

FW三上 大埜 早川 高橋 岡本 HB有馬 横山 海老原 FB須賀 斉藤 GK近藤

▽東京選手権 兼 国体予選

9月18日 東伏見 1回戦 東大LB 5－0 青蹴会

9月25日 武蔵野 準々決勝 東大LB 2－1（0－1）駿台

10月2日 武蔵野 決勝 東大LB 5－0（3－0）BRB

▽第4回国民体育大会 関東予選

10月8日 武蔵野 準決勝 東大LB 9－3（4－3）茨城

10月9日 武蔵野 決勝 東大LB 4－2（2－1）神奈川

（本大会＝11月1～3日、武蔵野＝は東早慶連合の東京クラブが出場し準優勝。東大LBから7名参加）

▽朝日招待サッカー

1月8日 西宮 全東大 3－0（2－0）全神商大

▽関東大学OBリーグ

2月25日 東大G 東大LB 3－0 法友ク

◆昭和25年度

▽東京選手権 兼 国体予選

9月8日 武蔵野 決勝 東大LB 2－3（1－1）東蹴

FW秋山 大埜 三上 高橋 岡本 HB瀬藤 丸山 海老原 FB中村 大貫 GK山本

◆昭和26年度

▽全日本選手権関東予選

4月22日 東伏見 1回戦 東大LB ＊－＊ 第一生命

4月29日 武蔵野 2回戦 東大LB 2－0 浦和ク

5月6日 武蔵野 準決勝 東大LB ＊－＊ 中大A

5月13日 武蔵野 決勝 東大LB 2－4（1－1）全立大

◆昭和28年度

▽全日本選手権関東予選

4月12日 東伏見 東大LB 2－1（1－1）学芸大

4月18日 東伏見 東大LB 6－0（0－0）中大

4月25日 武蔵野 決勝 東大LB 2－2（0－0）延長0－0

再延長0－0 再々延長0－0 再々々延長0－1 教大クラブ

FW西本 大埜 岡野 中島 藤本 HB浅見 有馬 原 FB松元 柴沼 GK立石

◆昭和29年度

▽全日本選手権関東予選

4月24日 東大G 東大LB 12－1（6－0）一橋大

4月25日 東大G 東大LB 2－1（2－0）全法政大

4月29日 東大農学部 東大LB 1－6（0－3）中大クラブ

◆昭和31年度

▽全日本選手権大会（大宮）

5月3日 1回戦 東大LB 1－6（1－4）八幡製鉄

◆昭和33年度

▽全日本選手権関東予選

7月12日 御殿下 全東大 2－1（0－0）早大WMW
 FW藤本 浅見 岡野 島田 野沢 HB原 海老原 服部 FB高田 柴沼 GK長浜

7月13日 御殿下 全東大 3－1（1－0）古河
 FW島田 浅見 岡野 中島 藤本 HB原 海老原 服部 FB高田 柴沼 GK長浜

7月20日 御殿下 全東大 3－2 全立教

▽全日本選手権大会 3位

9月6日 藤枝東高 東大LB 1－1（0－1）延長2－1（1－1） 京都紫光

9月7日 藤枝東高 東大LB 1－0（0－0） 東洋工業
 FW島田 浅見 岡野 中島 藤本 HB原 海老原 服部 FB高田 柴沼 GK長浜

9月8日 藤枝東高 準決勝 東大LB 0－1（0－0） 八幡製鉄
 FW島田 小山 岡野 中島 藤本 HB浅見 海老原 服部 FB高田 柴沼 GK長浜

9月9日 藤枝東高 3位戦 東大LB 4－2（2－2） 志太クラブ
 FW島田 浅見 岡野 中島 藤本 HB原 海老原 服部 FB高田 柴沼 GK長浜

年 表

年号	西暦	東大のサッカー	
大正6年	1917		
大正7年	1918	第1回関東蹴球大会（模範試合）帝大蹴球団（八高OBで編成）対高師B（0-0）	
大正8年	1919		
大正9年	1920	第3回関東蹴球大会（模範試合）帝大蹴球団（初の東大統合チーム）対アストラ・クラブ（3-0）	
大正10年	1921	第4回関東蹴球大会（模範試合）帝大蹴球団 対高師（0-2）	野津謙第5回極東大会出場
大正11年	1922	専門学校蹴球リーグ 2位	
大正12年	1923		第1回全国高等学校選手権大会開催 野津謙、新田純興の企画
大正13年	1924	関東大学リーグ1部 2位	
大正14年	1925	関東大学リーグ1部 2位	東大第5回全日本選手権準優勝 竹腰重丸、第7回極東大会選手権出場
大正15年	1926	関東大学リーグ1部 優勝	
昭和2年	1927	関東大学リーグ1部 優勝	竹腰重丸、第8回極東大会選手権出場
昭和3年	1928	関東大学リーグ1部 優勝	東大チーム、上海遠征
昭和4年	1929	関東大学リーグ1部 優勝 東西優勝校争覇戦に勝利、全国制覇 対関学 3-2	
昭和5年	1930	関東大学リーグ1部 優勝 東西優勝校争覇戦に勝利、全国制覇 対京大 2-1	竹腰重丸、竹内第三、篠島秀雄、高山忠雄、手 島志郎、若林竹雄、春山泰雄、野沢正雄、阿部 鵬二が日本代表として極東大会に出場
昭和6年	1931	関東大学リーグ1部 優勝 東西優勝校争覇戦、優勝を分ける 対関学 2-2	鈴木駿一郎、稲田龍三郎、竹腰重丸、船岡鉄司、 奥野熙、東西対抗OB戦に出場 東大LB第11回全日本選手権優勝
昭和7年	1932	関東大学リーグ1部 3位	鈴木駿一郎、稲田龍三郎、竹腰重丸、船岡鉄司、 生島克明、竹内第三、東西対抗OB戦に出場
昭和8年	1933	関東大学リーグ1部 3位	東京OBクラブ（東早慶OB）第13回全日本選手 権優勝
昭和9年	1934	関東大学リーグ1部 4位	竹腰重丸、監督として第10回極東大会参加
昭和10年	1935	関東大学リーグ1部 2位 東京学生蹴球連盟改組 関東大学蹴球連盟成る	竹腰重丸、竹内第三、阿部栄夫、東西対抗OB 戦に出場
昭和11年	1936	関東大学リーグ1部 4位	ベルリンオリンピック（竹内、種田、高橋、竹腰）
昭和12年	1937	関東大学リーグ1部 2位 朝日招待（対京大2-5）	関東大学OBリーグ 東大OB3連覇
昭和13年	1938	関東大学リーグ1部 2位	関東6人制選手権 東大LB優勝
昭和14年	1939	関東大学リーグ1部 3位 東大第19回全日本選手権4位	関東6人制選手権 東大OB優勝
昭和15年	1940	関東大学リーグ1部 4位 東大第20回全日本選手権3位	
昭和16年	1941	関東大学リーグ1部 優勝 帝大、早大がリーグ戦績で並び優勝決定戦も 1-1で引き分け、両校 優勝となる	
昭和17年	1942	関東大学リーグ1部 優勝 関東学生選手権大会 準優勝 東西代表校対抗戦（対関学8-1）	
昭和18年	1943	関東大学リーグ1部 優勝 関東大学サッカー連盟の記録では中止となっている 関東学生選手権大会 優勝	
昭和19年	1944	戦時で休止	
昭和20年	1945	戦時で休止	
昭和21年	1946	関東大学リーグ1部 2位 関東学生選手権大会 優勝	東大LB第26回全日本選手権優勝 第1回国民体育大会 東大LB準優勝
昭和22年	1947	関東大学リーグ1部 3位	
昭和23年	1948	関東大学リーグ1部 優勝 東西学生第1位対抗 対関学 0-2	

日本のサッカー	世界のサッカー	その頃の世界、日本	西暦	年号
第3回極東選手権大会（東京）、日本代表は東京高等師範		ロシア10月革命ソビエト政権樹立	1917	大正6年
日本フットボール大会（現在の高校選手権の前身）開催			1918	大正7年
			1919	大正8年
			1920	大正9年
第5回極東選手権大会（上海）、日本代表は全東京			1921	大正10年
大日本蹴球協会創立			1922	大正11年
第6回極東選手権大会（大阪）		関東大震災	1923	大正12年
日本代表は大阪サッカー倶楽部			1924	大正13年
第7回極東選手権大会（マニラ）	ルール改正		1925	大正14年
日本代表は大阪サッカー倶楽部	（オフサイド3人→2人）			
		12月25日、元号が昭和となる	1926	大正15年
第8回極東選手権大会（上海）、早大WMWが初勝利			1927	昭和2年
			1928	昭和3年
日本FIFAに加盟		世界恐慌（Black Thursday）	1929	昭和4年
第9回極東選手権大会（東京）、日本、中華民国と同位ながら初優勝	第1回W杯（ウルグアイ）		1930	昭和5年
日本代表は東大中心の選抜チーム	優勝ウルグアイ			
		満洲事変	1931	昭和6年
		五・一五事件	1932	昭和7年
			1933	昭和8年
第10回極東選手権大会（マニラ）	第2回W杯（イタリア）		1934	昭和9年
	優勝イタリア			
		第一高等学校が駒場に移転 （東京帝大農学部と敷地を交換）	1935	昭和10年
ベルリンオリンピック（初出場）	ベルリンオリンピック	二・二六事件	1936	昭和11年
		日中戦争勃発	1937	昭和12年
	第3回W杯（フランス）		1938	昭和13年
	優勝イタリア			
		第二次世界大戦勃発	1939	昭和14年
		皇紀2600年	1940	昭和15年
		太平洋戦争勃発	1941	昭和16年
		学制短縮のため12月卒業		
	ドイツ開催予定のW杯中止		1942	昭和17年
		7月1日、東京府・東京市が廃止されて東京都が設置された	1943	昭和18年
			1944	昭和19年
		第二次世界大戦終了	1945	昭和20年
		日本国憲法公布	1946	昭和21年
		東京大学に初めて女子学生が入学		
		日本国憲法施行	1947	昭和22年
			1948	昭和23年

年号	西暦	東大のサッカー		
昭和24年	1949	関東大学リーグ1部	4位	東大LB第29回全日本選手権優勝
昭和25年	1950	関東大学リーグ1部	5位	朝日招待全東大勝利
昭和26年	1951	関東大学リーグ1部	6位	
昭和27年	1952	関東大学リーグ1部	7位	第1回大学選手権 優勝 下方入替戦（対青学4-0）残留
昭和28年	1953	関東大学リーグ1部	6位	国際学生スポーツ週間（ドルトムント大会） （岡野、竹腰監督）
昭和29年	1954	関東大学リーグ1部	7位	第3回大学選手権 3位 下方入替戦（対法大6-1）残留
昭和30年	1955	関東大学リーグ1部	7位	第4回大学選手権 3位
昭和31年	1956	関東大学リーグ1部	8位	下方入替戦（対法大1-2）降格
昭和32年	1957	関東大学リーグ2部	2位	優勝決定戦に敗れて2位
昭和33年	1958	関東大学リーグ2部	2位	東大LB第38回天皇杯全日本選手権3位
昭和34年	1959	関東大学リーグ2部	優勝	優勝決定戦に勝ち優勝 上方入替戦（対法大0-2）残留
昭和35年	1960	関東大学リーグ2部	4位	
昭和36年	1961	関東大学リーグ2部	2位	
昭和37年	1962	関東大学リーグ2部	優勝	上方入替戦（対法大0-1）残留
昭和38年	1963	関東大学リーグ2部	3位	御殿下クラブ発足
昭和39年	1964	関東大学リーグ2部	5位	
昭和40年	1965	関東大学リーグ2部	3位	
昭和41年	1966	関東大学リーグ2部	5位	
昭和42年	1967	関東大学リーグ2部	5位	御殿下クラブ関東リーグ入り
昭和43年	1968	関東大学リーグ2部	3位	メキシコオリンピック（岡野コーチ）
昭和44年	1969	関東大学リーグ2部	優勝	上方入替戦（対中大0-7）残留 御殿下少年サッカークラブ発足
昭和45年	1970	関東大学リーグ2部	4位	
昭和46年	1971	関東大学リーグ2部	4位	
昭和47年	1972	関東大学リーグ2部	7位	下方入替戦（対明学大4-3）残留
昭和48年	1973	関東大学リーグ2部	4位	
昭和49年	1974	関東大学リーグ2部	6位	
昭和50年	1975	関東大学リーグ2部	6位	
昭和51年	1976	関東大学リーグ2部	5位	
昭和52年	1977	関東大学リーグ2部	7位	下方入替戦（対立正大1-2）降格
昭和53年	1978	東京都大学リーグ1部	6位	
昭和54年	1979	東京都大学リーグ1部	5位	
昭和55年	1980	東京都大学リーグ1部	4位	関東大会準決勝（対明学大0-2）
昭和56年	1981	東京都大学リーグ1部	6位	

日本のサッカー	世界のサッカー	その頃の世界、日本	西暦	年号
		新制大学へ移行	1949	昭和24年
	第4回W杯（ブラジル） 優勝ウルグアイ	朝鮮戦争はじまる	1950	昭和25年
		サンフランシスコ講和条約調印	1951	昭和26年
			1952	昭和27年
			1953	昭和28年
	第5回W杯（スイス） 優勝西ドイツ		1954	昭和29年
野津謙日本蹴球協会会長に就任（このあと10期26年間）			1955	昭和30年
メルボルンオリンピック（出場）		日本、国際連合に加盟	1956	昭和31年
			1957	昭和32年
	第6回W杯（スウェーデン） 優勝ブラジル ミュンヘンの悲劇	東京タワー完成	1958	昭和33年
			1959	昭和34年
野津会長、代表コーチにデットマール・クラマーを招聘		日米安保条約調印	1960	昭和35年
		ベルリンの壁設置	1961	昭和36年
	第7回W杯（チリ） 優勝ブラジル		1962	昭和37年
		ケネディ大統領暗殺	1963	昭和38年
東京オリンピック（ベスト8）		東海道新幹線開通	1964	昭和39年
日本サッカーリーグ発足			1965	昭和40年
	第8回W杯（イングランド） 優勝イングランド		1966	昭和41年
			1967	昭和42年
メキシコオリンピック（銅メダル）		各地で大学紛争	1968	昭和43年
			1969	昭和44年
	第9回W杯（メキシコ） 優勝ブラジル	EXPO70（大阪万博）開催 よど号ハイジャック事件	1970	昭和45年
		マクドナルドの日本1号店が東京・銀座に開店	1971	昭和46年
		あさま山荘事件 沖縄返還	1972	昭和47年
			1973	昭和48年
	第10回W杯（西ドイツ） 優勝西ドイツ	三菱重工爆破事件	1974	昭和49年
		第1回サミットがフランスで開催 サイゴン（当時）陥落、ベトナム戦争が終結	1975	昭和50年
協会法人化（財）日本サッカー協会に改称		ロッキード事件 家庭用VHSビデオテープレコーダ1号機発売	1976	昭和51年
奥寺康彦1F Cケルンに移籍			1977	昭和52年
	第11回W杯（アルゼンチン） 優勝アルゼンチン	新東京国際空港（成田）開港	1978	昭和53年
		イラン革命 ソ連がアフガニスタンに侵攻 スリーマイル島原子力発電所事故	1979	昭和54年
		ルービック・キューブブーム	1980	昭和55年
			1981	昭和56年

年号	西暦	東大のサッカー	
昭和57年	1982	東京都大学リーグ1部	6位 御殿下記念館建設のため、農学部グラウンドにホーム移動
昭和58年	1983	東京都大学リーグ1部	8位 自動降格
昭和59年	1984	東京都大学リーグ2部	4位
昭和60年	1985	東京都大学リーグ2部	優勝 自動昇格
昭和61年	1986	東京都大学リーグ1部	3位 関東大会2位 上方入替戦（対学習院大0－0）
昭和62年	1987	東京都大学リーグ1部	2位 関東大会1回戦（対千葉大0－1）
昭和63年	1988	東京都大学リーグ1部	7位
平成元年	1989	東京都大学リーグ1部	6位 農学部構内に部室完成
平成2年	1990	東京都大学リーグ1部	4位 関東大会1回戦（対関東学院大0－2）
平成3年	1991	東京都大学リーグ1部	3位 関東大会1回戦（対関東学院大0－1）
平成4年	1992	東京都大学リーグ1部	4位 関東大会2回戦（対創価大 負）
平成5年	1993	東京都大学リーグ1部	8位 自動降格
平成6年	1994	東京都大学リーグ2部	4位 チームDiego結成
平成7年	1995	東京都大学リーグ2部	3位 上方入替戦（対創価大1－1）残留
平成8年	1996	東京都大学リーグ2部	6位 下方入替戦（対明星大3－1）残留
平成9年	1997	東京都大学リーグ2部	6位 下方入替戦（対成蹊大0－2）降格
平成10年	1998	東京都大学リーグ3部B	優勝 自動昇格
平成11年	1999	東京都大学リーグ2部	3位
平成12年	2000	東京都大学リーグ2部	優勝 自動昇格
平成13年	2001	東京都大学リーグ1部	8位 自動降格
平成14年	2002	東京都大学リーグ2部	6位 自動降格
平成15年	2003	東京都大学リーグ3部B	2位 上方入替戦（対立教大0－3）残留
平成16年	2004	東京都大学リーグ3部B	2位 自動昇格 御殿下グラウンドに復帰
平成17年	2005	東京都大学リーグ2部	4位
平成18年	2006	東京都大学リーグ2部	3位 L B会法人化
平成19年	2007	東京都大学リーグ2部	5位
平成20年	2008	東京都大学リーグ2部	4位

日本のサッカー	世界のサッカー	その頃の世界、日本	西暦	年号
	第12回W杯（スペイン） 優勝イタリア	フォークランド紛争 500円硬貨発行	1982	昭和57年
			1983	昭和58年
			1984	昭和59年
	ヘイゼルの悲劇	N T T 民営化 国際科学技術博覧会（つくば万博） 開催	1985	昭和60年
	第13回W杯（メキシコ） 優勝アルゼンチン	チェルノブイリ原子力発電所事故発生 ハレー彗星大接近	1986	昭和61年
		国鉄が分割・民営化 大韓航空機爆破事件	1987	昭和62年
		青函トンネル・瀬戸大橋開通	1988	昭和63年
	ヒルズボロの悲劇	1月8日、元号が平成となる 消費税スタート ベルリンの壁崩壊	1989	平成元年
	第14回W杯（イタリア） 優勝西ドイツ	東西ドイツ統一	1990	平成2年
		湾岸戦争勃発 ソビエト連邦崩壊	1991	平成3年
			1992	平成4年
Jリーグ発足 「ドーハの悲劇」		EU発足	1993	平成5年
	第15回W杯（アメリカ） 優勝ブラジル		1994	平成6年
	ボスマン判決	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件	1995	平成7年
アトランタオリンピック（出場）			1996	平成8年
		香港、中国に返還	1997	平成9年
フランスワールドカップ（初出場） 岡野俊一郎、日本サッカー協会会長に就任（～2002）	第16回W杯（フランス） 優勝フランス		1998	平成10年
			1999	平成11年
シドニーオリンピック（ベスト8）			2000	平成12年
		アメリカ同時多発テロ事件	2001	平成13年
日韓ワールドカップ（ベスト16）	第17回W杯（日本・韓国） 優勝ブラジル		2002	平成14年
			2003	平成15年
アテネオリンピック（出場）			2004	平成16年
		愛・地球博（愛知万博）開催	2005	平成17年
ドイツワールドカップ（出場）	第18回W杯（ドイツ） 優勝イタリア		2006	平成18年
			2007	平成19年
北京オリンピック（男女出場）			2008	平成20年

東大L B会員 東京大学ア式蹴球部員名簿

東大L B会員

1918年 大正7年

高橋 礼本 法 八高
竹内 恵太郎 法 八高

1919年 大正8年

新田 純興 工 一高

1920年 大正9年

杉原 雄吉 経済 一高
田中 豊 法 七高
野津 謙 医 一高

1921年 大正10年

岸本 武夫 農
山崎 幸一郎 経済 八高
米谷 豊照 法 一高
渡辺 武 工

1922年 大正11年

折下 誠 文 七高
竹内 邦次郎 農 山口高
辰馬 俊夫 経済 八高
林 振成 経済 一高
別所 甫 法 八高

1923年 大正12年

出田 節雄 工 山口高
小林 清 医 八高
岸本 英夫 文 六高
小山 富蔵 法 水戸高
茂森 薫 工 山口高
藤本 直秀 文 三高

1924年 大正13年

朝生 要人 経済 水戸高
木村 康一 医 水戸高
杉野 薫 経済 松江高
鈴木 喜久男 工 八高
田中 久 医
中嶋 道雄 経済 水戸高
中村 陽吉 法 八高
松井 三郎 医 水戸高
村上 一雄 農 松江高

1925年 大正14年

秋原 正雄 法 山口高
伊藤 誠朗 経済 松本高
井上 克巳 医 山口高
井上 七兵衛 経済 松江高
潮 安 文 山口高
小島 政俊 経済 松山高
坂本 彪 経済 松江高
塩原 三郎 工 水戸高
竹腰 重丸 農 山口高
竹村 勝衛 工
永田 竜之助 農 松江高
中嶋 健蔵 文 松本高
並川 安幸 文 松江高
野島 福太郎 経済 七高
乗富 文夫 経済 水戸高

堀田 嘉幸 工 八高
松野 三郎 文 松江高
山本 良造 工 八高

1926年 大正15年

荒井 力 工 水戸高
安東 新午 工 水戸高
井上 正吉 経済 松江高
黒田 留一郎 工 松江高
鈴木 駿一郎 理 八高
土井 由之 理 一高
二星 豊彦 理 松江高
林 不二雄 法 水戸高
船橋 大 経済 七高
森脇 大五郎 理 八高
山路 誠 法 一高

1927年 昭和2年

大町 篤 農 山口高
小川 忠恵 法 二高
奥野 熙 法 一高
北村 郁三郎 経済 水戸高
近藤 八三 工 八高
潮村 浪雄 法 広島高
武井 玄介 法 静岡高
中島 實 法 七高
盤瀬 太郎 経済 二高
細井 敏夫 経済 浦和高
和田 盛三 経済 水戸高
渡辺 誠 文

1928年 昭和3年

青山 幸一郎 法 八高
板野 清 農 水戸高
稲田 竜三郎 工 七高
鬼塚 信彦 文 七高
斉藤 五郎 法 山口高
篠島 秀雄 法 東京高
高山 忠雄 文 八高
田辺 輝一郎 工 二高
東原 繁次 経済 水戸高
春山 泰雄 経済 水戸高
船岡 哲司 経済 広島高
法貫 三郎 法 山口高
若林 竹雄 経済 松山高

1929年 昭和4年

生島 克明 経済 東京高
塩原 敬五 経済 二高
竹内 悌三 経済 浦和高
手島 志郎 農 広島高
野沢 正雄 農 広島高
山川 敏夫 文 東京高
山崎 健二 工 山口高

1930年 昭和5年

市川 達郎 法 浦和高
出浦 清一 法 静岡高
倉辻 實俊 工 山口高
豊崎 光衛 法 大阪高
内藤 健三 法 松山高
林 史郎 工
三宅 豊幸 法 八高

1931年 昭和6年

今村 秀夫 法 東京高
神原 健 理 浦和高
菊地 健一 法 武蔵高
木村 久男 工 東京高
桑田 規矩男 経済 東京高
芝地 光 経済 五高
島崎 辰二 法 五高
高山 英華 工 成蹊高
田村 富二郎 文 東京高
日高 秀吉 文 成城高
藤岡 端 文 静岡高
宮原 俊雄 工 八高
山田 信一 経済 東京高
和田 重暢 工 武蔵高

1932年 昭和7年

江崎 憲弥 法 武蔵高
太田 博太郎 工 武蔵高
片山 甲子男 経済 静岡高
川村 満雄 工 東京高
原田 惇 経済 水戸高
宮内 守三郎 経済 松山高
八巻 直躬 工 武蔵高
横田 周平 工 水戸高

1933年 昭和8年

太田 公平 経済 水戸高
小川 清一 法 一高
川島 三四郎 工 一高
川原 享 法 水戸高
菊池 武美 医 水戸高
信田 正 経済 松山高
高橋 覚 法 東京高
萩原 正治 文 水戸高
服部 正策 工 東京高
廣渡 浩美 法 広島高
宮沢 正雄 工 成蹊高
森 茂 工 東京高
渡辺 弘 工 成蹊高

1934年 昭和9年

愛知 悌一 工 成蹊高
稲川 達 工 一高
大内 弘 経済 一高
沖 朗 法 一高
笠原 新太郎 工 二高
佐藤 文夫 法 五高
近石 経雄 工 六高
長 亨 法 広島高
寺沢 一彦 工 二高
松浦 武男 経済 二高
光藤 俊雄 経済 浦和高
若林 義夫 工 六高

1935年 昭和10年

種田 孝一 経済 水戸高
塩沢 弘雄 経済 水戸高
潮田 収 法 武蔵高
神保 恒 法 六高
徳田 晃一 工 武蔵高
長見 正三 法 弘前高
二宮 淳 経済 水戸高

野田 礼治 経済 東京高
 藤岡 卓人 法 水戸高
 森 孝雄 経済 東京高
 横山 佐蔵 工 東京高

1936年 昭和11年

秋保 義雄 経済 成城高
 阿部 栄夫 工 東京高
 河西 清 工 東京高
 加藤 匡夫 法 東京高
 菊池 宏 農 二高
 後藤 典夫 工 広島高
 小林 孝正 法 五高
 小林 卓郎 文 水戸高
 高橋 豊二 農 成城高
 田村 三郎 農 武蔵高
 築島 開一 工 六高
 林 文二 経済 広島高
 松村 達夫 経済 府立高
 宮本 惇 法 東京高

1937年 昭和12年

岩動 洋二 法 山形高
 大槻 忠夫 工 二高
 大屋 宏 工 六高
 奥田 正明 農 成蹊高
 喜谷 慶一 法 一高
 吉田 正伍 経済 六高

1938年 昭和13年

飯島 栄次 農 山形高
 大山 政行 法 一高
 力石 五郎 経済 府立高
 直木 和 法 六高
 長谷部 富彦 工 二高

1939年 昭和14年

有泉 俊亮 工 東京高
 有馬 洪 医 浦和高
 大場 景雄 農 成城高
 岡崎 恭一 経済 山形高
 笹間 正義 経済 武蔵高
 鶴田 正彦 工 水戸高
 近重 八郎 工 六高
 浜野 充理泰 農 成城高
 原田 饒 工 府立高
 山岡 元嗣 経済 府立高
 横山 陽三 文 東京高

1940年 昭和15年

天野 公義 文・法 府立高
 種田 憲次 医 浦和高
 大谷 四郎 経済 一高
 柏木 大安 農 静岡高
 菊池 武弥 医 水戸高
 小亀 憲三 工 武蔵高
 島田 哲夫 農 山形高
 山田 彦雄 農 八高
 渡辺 恒行 法 東京高

1941年 昭和16年

渥美 節夫 法 静岡高
 奥島 雄次郎 農 松山高
 奥瀬 雅久 経済 浦和高
 木村 栄一 経済 水戸高
 水津 肇 工 一高

花田 正彦 弘前高
 武者 廣吉 工 二高
 渡辺 隆二 工 府立高

1942年 昭和17年

飯塚 祐 医 静岡高
 大井上 正雄 法 一高
 大貫 雅敏 文 成城高
 加藤 信幸 医 一高
 近藤 健男 工 府立高
 齋藤 賢吾 経済 六高
 須賀 敏孝 農 水戸高
 三上 一郎 工 一高
 矢嶋 幹男 工 六高
 不破 新 法 東京高
 小林 敏郎 経済 府立高
 渡辺 洋三 法 一高

1943年 昭和18年

伊藤 泰方 法 一高
 岡本 潤一 工 浦和高
 高月 東一 文 四高
 永井 卓也 経済 都立高
 中村 勇二 経済 松本高
 本城 治彦 法 一高

1944年 昭和19年

黒津 亮二 工 一高
 古泉 榮一 工 都立高
 濃野 滋 法 東京高
 佐々木 俊郎 農 弘前高
 佐藤 正猪 法 浦和
 高崎 達也 工 静岡高
 遠山 直道 経済 都立高
 馬渡 一眞 法 水戸高
 三井 忠夫 工 都立高
 山崎 英耶 法 浦和高
 村瀬 隆二 文 東京高
 長島 喬 経済 松本高

1945年 昭和20年

後藤 大三 工 新潟高
 高橋 敏彦 法 都立高
 二宮 泰 工 水戸高
 馬越 和英 経済 六高
 松元 五郎 経済 成城

1946年 昭和21年

早川 純生 理 学習院

1947年 昭和22年

天野 晴郎 農 五高
 海老原 純 経済 水戸高
 大崎 昭 工 浦和高
 大島 正直 工 東京高
 小倉 義文 工 成蹊高
 坂本 和男 文 三高
 橋本 恒太郎 工 五高
 福田 重信 法 東京高
 松平 英人 経済 静岡高
 丸山 智信 経済 武蔵高
 本永 成二郎 工 一高
 柳沢 長治 法 松本高

1948年 昭和23年

秋山 榮 農 姫路高

池原 秋男 経済 成蹊高
 大埜 正雄 経済 水戸高
 中村 一夫 法 六高

1949年 昭和24年【旧制】

石川 晴樹 経済 水戸高
 加藤 真三郎 工 浜松工専
 菊井 維正 法 武蔵高
 中条 一雄 農 広島高
 八星 孚 理 水戸高
 三輪 嘉晟 工 六高
 安氏 孝一 農 弘前高
 山田 敏郎 農 松本高
 (十四郎)
 吉富 裕 経済 山口高

1949年 昭和24年【新制】

関 彦太 工 都立西

1950年 昭和25年【旧制】

石井 正 工 浦和高
 海老原 朗 経済 水戸高
 柴沼 明 法 水戸高
 坪田 重規良 工 富山高
 中原 壯六 経済 大分経専
 山本 一次 文 一高

1950年 昭和25年【新制】

岡野 俊一郎 文 小石川
 金井 弘夫 理 成蹊
 川辺 正行 工 新宿
 立石 知也 経済 小石川
 中川 勉 法 希望丘
 長山 樹 法 小石川
 新倉 雄三 工 成城
 原 忠彦 経済 教育大附
 藤井 和彦 経済 两国

1951年 昭和26年

折原 一雄 文 小石川
 柴沼 晋 教育 教育大附
 鈴木 美暢 工 湘南
 深見 浩一 経済 麻布
 藤本 鉄也 法 教育大附
 帆足 祀夫 工 豊多摩

1952年 昭和27年

浅見 俊雄 教育 浦和
 飯塚 肇 工 新宿
 牛木 素吉郎 文 新潟
 片山 義朗 工 島原
 楠田 喜宏 工 修猷館
 中島 裕 農 都立西
 西本 晃二 文 成蹊
 浜口 博彦 工 四日市
 山野 一郎 農 甲府一
 山本 修 工 湘南

1953年 昭和28年

稲井 収一 経済 都立西
 片原 清 農 広大附
 倉田 日出男 法 小石川
 小松 新樹 工 神戸
 嶋田 武夫 工 湘南
 対木 昭寿 法 戸山
 津田 義久 法 灘

植村 祐幸 経済 新宿
小野田 莊平 農 都立西
影本 浩 工 修道
杉浦 裕 医 旭丘
多田 均 法 洛西
田中 靖 経済 湘南
谷本 篤信 工 教育大附駒場
茅野 浩一 工 諏訪清陵
堀井 茂 経済 教育大附駒場
御園 慎一郎 法 灘
陽 雅文 工 富山中部
南谷 尚志 法 大教大附天王寺
宮武 明 経済 桐朋

1973年 昭和48年

池田 吉彦 文 都立西
岩田 武史 工 湘南
加藤 重和 工 栄光学園
藤原 真一 法 岡山朝日
三島 茂 薬 千葉
森井 太一 工 教育大附

1974年 昭和49年

青山 研一郎 経済 旭丘
阿部 吉弘 理 前橋
井田 淳 経済 戸山
猪熊 康夫 工 灘
大矢 隆司 経済 旭丘
加川 実 経済 横浜翠嵐
澄道 隆 工 教育大附
本庄 孝志 法 麻布
牧野 尚雄 工 都立西
森 俊勝 工 前橋
山崎 隆志 理 大教大附天王寺

1975年 昭和50年

上村 司 法 灘
岸戸 健 工 教育大附駒場
広瀬 一郎 法 藤枝東
宮 恭久 文 栄光学園
吉江 建一 工 麻布
吉野 元章 工 広島学院

1976年 昭和51年

青山 市三 工 滝
飯島 正 工 小石川
井田 陽彦 経済 四日市
大塚 伸宏 工 仙台第一
柿木 真澄 法 鹿児島ラ・サール
菊地 保旨 農 横須賀
佐藤 敦郎 経済 都立西
平林 健一 農 桐朋
湊 和則 法 広島学院
宮崎 洋 工 都立西
山本 洋一 工 横浜翠嵐

1977年 昭和52年

安藤 豊 工 修猷館
牛窪 健一 農 金沢大附
(山川)
田河 一郎 理 青山
田中 聡 文 聖光学院
福田 信夫 理 鹿児島ラ・サール
松元 明弘 工 鹿児島ラ・サール

1978年 昭和53年

赤星 克彦 農 鹿児島ラ・サール
飯島 敦 経済 都立西
川村 公一 工 桐朋
坂田 中 経済 鹿児島ラ・サール
志水 利彰 工 湘南
福沢 伸哉 経済 麻布

1979年 昭和54年

安 秀和 農 都立西
植田 浩 法 大教大附天王寺
熊倉 政宣 工 宇都宮
後藤 啓 教養 鹿児島ラ・サール
斎川 路之 工 立川
柴田 光弘 工 新宿
清水 靖裕 工 武蔵
高木 智 工 大分国東
明日香 寿川 農 戸山
(張)
中谷 知弘 薬 淳心学院
中野 北斗 法 教育大附駒場
西田 裕 経済 高松
西野 耕一 工 鹿児島ラ・サール
橋本 晴充 工 神奈川県立多摩
和田 康太郎 法 立川

1980年 昭和55年

荒川 文男 工 宇都宮
井上 次典 工 宮崎南
木下 茂 経済 浦和
柴田 周 工 高松
赤城 庸人 経済 札幌西
田中 琢二 教養 愛光
中野 雅仁 工 天王寺
永山 慶一 工 湘南
萩原 豊 文 屋代

1981年 昭和56年

飯田 裕樹 工 成蹊
石坂 哲将 法 浜松北
伊藤 洋 経済 山形東
牛草 哲朗 文・法 聖光学院
衛藤 公洋 教養 千葉
小野 平 工 灘
河合 耕作 法 武蔵
近藤 晋 経済 東海
笹間 鉄也 文 早大学院
仙石 雄三 工 東海
手嶋 通晴 工 広大附
久井 大樹 経済 久留米大附設
安田 賢一 工 天王寺

1982年 昭和57年

上原 裕之 経済 栄光学園
小泉 泰郎 経済 学芸大附
手塚 久 経済 湘南
森 光金 経済 戸山
山本 昇 経済 広大附

1983年 昭和58年

加藤 広史 経済 武蔵
佐藤 哲治 法 沼津東
鈴木 修二 農 桐朋
谷本 真人 経済 桐朋
馬場 洋一 農 久留米大附設
山下 毅 法 浜松北

1984年 昭和59年

今井 勝典 法 広島学院
金子 健紀 法 学芸大附
久保田 健 農 清水東
鹿園 直毅 工 水戸第一
末永 孝彦 工 学芸大附
末永 浩 農 福岡
利重 孝夫 教養 栄光学園
浜田 穰太郎 教養 栄光学園
外野 雅彦 工 鹿児島ラ・サール
山本 武志 教養 広大附
湯原 真人 経済 桐朋

1985年 昭和60年

大久保 将之 工 湘南
後藤 裕一 教育 山形南
齐木 康二 法 筑波大附駒場

1986年 昭和61年

安藤 拓郎 法 開成
磯村 建夫 工 武蔵
内田 智之 工 桐朋
小幡 健太郎 法 学芸大附
鹿取 正信 工 戸山
金元 輝 教育 光陵
金児 敦弘 経済 武蔵
熊岡 尚 工 海城
黒木 博史 工 高鍋
清水谷 諭 法 灘
住谷 安史 工 桐朋
手塚 耕治 経済 前橋
中村 文彦 法 総社
中村 雅文 工 桐朋
萩原 繁 農 筑波大附駒場
橋本 昌司 法 広大附
早野 裕 理 桐蔭学園
横井 聡 工 栄光学園

1987年 昭和62年

浅野 聖太 法 麻布
荒巻 俊也 工 土浦一
小島 恭 教養 栄光学園
白枝 哲次 工 海城
津村 健司 工 大教大附天王寺
中村 聡 法 桐蔭学園
平岡 洋 農 鹿児島ラ・サール
山口 壱和 法 灘
山田 折一 法 小田原

1988年 昭和63年

天野 賢一 農 岡崎
稲村 孝史 農 青山学院
萩野 哲弘 経済 広島学院
早間 央 文 福山誠之館
加藤 久直 経済 筑波大附駒場
嶋田 陽介 経済 旭丘
中村 一朗 経済 広島学院
蜷川 明男 文 海城
前沢 重男 工 青山

1989年 平成元年

大西 啓介 法 鹿児島ラ・サール
吉岡 克真 工 筑波大附
片山 直樹 農 新居浜西
小松 成 法 鹿児島ラ・サール
堀江 弘一郎 経済 灘

黒岩 征	経済	麻布	村岡 哲郎	教育	明和		
清水 崇	工	甲陽学院	矢作 真美	経済	筑波大附駒場	1999年 平成11年	
岡垣 啓司	文	戸山	山下 高広	農	広島学院	緒方 崇裕	農 熊本
一色 史雄	工	麻布	吉田 貢士	農	清風南海	小野 高志	教育 国際情報
中村 智	理	東葛飾				胡内 健一	工 旭丘
菊池 勇治	経済	駒場東邦	1994年 平成6年			都島 豪志	工 東海
前田 剛	工	清風南海	秋山 淳	法	桐蔭学園	中島 大智	工 学芸大附
北井 利玄	経済	暁星	加藤 浩隆	経済	開成	新山 通世	法 筑波大附
星川 佳広	教養	旭丘	川人 解	法	大宮	吉田 寛	経済 武蔵
阿保 史彦	工	浦和	手塚 慶太	工	都立西	米山 雅也	経済 桑名
磯 新	工	鹿兒島ラ・サール	萩原 隆之	工	鹿兒島ラ・サール		
上杉 強志	経済	筑波大附駒場	端本 昌夫	医	鹿兒島ラ・サール	2000年 平成12年	
島上 浩二	経済	光陵	菱沼 紀行	工	海城	河島 清貴	文 八王子東
瀬戸 二郎	工	国立	増田 直毅	工	桐蔭学園	小松 幸広	工 土浦第一
			矢野 将文	法	愛光	鈴木 泰輔	農 国立
			山下 聖志	法	久留米大附設	清 雄一	工 長崎南
1990年 平成2年						高橋 康一	理 国立
甲斐 正彦	工	鹿兒島ラ・サール	1995年 平成7年			費川 俊	経済 川越
霜島 弘則	経済	藤枝東	飯島 良介	理	武蔵	茂木 高志	経済 浦和
高橋 恒介	経済	桐朋	大谷 聡	文	筑波大附駒場	山地 毅彦	工 土浦第一
西原 基史	文	愛光	越部 経憲	工	武蔵	渡部 雅史	経済 愛光
檜川 和正	工	広島学院	小林 政雄	経済	武蔵	渡辺 勇樹	法 広大附
藤原 英正	法	武蔵	永井 伸	工	平塚江南		
			日高 直俊	工	倉敷南	2001年 平成13年	
1991年 平成3年			樋渡 類	法	広大附	青山 昌太	教養 創価
有馬 嘉彦	農	真岡	藤井 哲	教育	桐朋	河村 俊太郎	文 駒場東邦
江村 歆	工	戸山	宮川 尚久	工	山形東	坂本 優	工 千葉
大石 智弘	農	久留米大附設	米良 英剛	法	船橋	瀬谷 洋平	農 宇都宮
大川 幸樹	農	佐原				辻 正太	教育 西大和
小代 義行	工	加古川東				馬場 文玄	工 早稲田
紀伊 智裕	工	久留米大附設	1996年 平成8年			一言 正之	工 駒場東邦
来住 修	農	光陵	伊地知 亮太	法	鹿兒島ラ・サール	牧 尚史	工 星光学院
高橋 康之	教育	日比谷	伊藤 達夫	文	桐蔭学園		
信国 陽二郎	理	浦和	梅村 充	工	暁星		
藤井 玄	理	栄光学園	下田 修平	文	麻布	2002年 平成14年	
布瀬川 平	工	武蔵	鈴木 幹太	教育	灘	朝倉 赳	経済 駒場東邦
森田 博通	法	洛南	永井 悟	理	水戸第一	岩田 真吾	法 海城
森山 圭	工	鹿兒島ラ・サール	新倉 一郎	工	横浜緑ヶ丘	上土居 悠	工 修道
吉川 健司	法	藤島	福田 雅	経済	暁星	梶原 康嗣	工 巣鴨
分部 隆夫	経済	灘	古川 大輔	農	桐蔭学園	北村 篤司	法 筑波大附駒場
渡辺 智	工	熊谷				寺田 宏幸	文 高岡
			1997年 平成9年			福島 周作	工 筑紫丘
1992年 平成4年			足立 雅人	工	土浦第一	宮副 照久	工 筑紫丘
阿部 貴弘	工	巣鴨	五十嵐 朝青	法	土浦第一	山崎 浩平	工 桐蔭学園
石井 圭介	法	鹿兒島ラ・サール	伊藤 陽介	法	山形東		
今井 盛広	教育	聖光学院	小川 和聖	法	桐蔭学園	2003年 平成15年	
神田 毅	工	開成	我部 有	薬	筑波大附	赤木 升	法 世田谷学園
島 桂一	法	武蔵	長瀬 拓生	工	開成	池田 亮一	文 岡山朝日
鈴木 智典	農	宮崎南	浜田 聡	教育	洛南	石川 敏照	工 智辯和歌山
瀬戸 三郎	理	筑波大附駒場	広谷 昌俊	経済	筑波大附駒場	石黒 雄一	法 桐朋
中井 章人	工	大教大附池田	本多 祐樹	工	久留米大附設	今西 康雄	工 青山学院
西馬 功泰	工	淳心学院	松村 正之	理	桐蔭学園	金子 泰拓	経済 筑波大附駒場
古川 弘之	法	武蔵				河村 卓修	経済 筑波大附駒場
前川 圭吾	農	麻布	1998年 平成10年			小林 誠	経済 麻布
松田 直樹	工	日比谷	荒牧 嗣夫	理	栄光学園	佐藤 洋平	教養 巣鴨
松行 輝昌	経済	暁星	上岡 匠	教育	愛光	齋木 拓郎	法 麻布
宮沢 啓明	文	千葉	大町 卓也	教養	桐朋	諏訪 俊	農 世田谷学園
			沖野 泰之	理	広島学院	中村 達也	工 徳山
1993年 平成5年			柿木 充	工	盛岡第一	西村 直紀	教養 駒場東邦
江口 英樹	工	水戸第一	鎌倉 貞之	薬	湘南		
竹内 真之介	経済	麻布	斎藤 智治	工	小田原	2004年 平成16年	
多留 偉功	薬	筑波大附駒場	中澤 篤史	教育	東大寺学園	青木 宏	工 小田原
塚本 俊作	経済	海城	祝部 智紀	農	広島学院	明石 篤	経済 筑波大附駒場
服部 浩介	経済	聖光学院	光井 逸平	工	麻布	碓 知也	教育 広大附福山
濱本 三喜男	工	海城	幸田 健	経済	麻布	池田 暁彦	工 麻布
原田 剛	工	麻布	携木 崇史	経済	武蔵	伊藤 慶一	農 駒場東邦
原田 康史	農	洛南	山中 直岐	農	筑波大附	伊藤 貴寛	工 竹園

太田 裕一	工	膳所
金山 祐介	理	麻布
菊月 達也	工	東邦大東邦
木野本 朋哉	経済	東大寺学園
杉山 翔一	法	厚木
富永 啓太	法	灘
畑中 計政	文	熊本
水口 智	文	桐朋
宮城 康暢	工	岡山白陵
宮本 雅之	経済	麻布
百谷 将佑	工	東大寺学園
門田 大範	文	広島学院

●女子マネージャー

1998年 平成10年

南谷 梨紗 上智大 恵泉女学園

2000年 平成12年

加藤 今日子 お茶ノ水女子大 土浦第一

2001年 平成13年

江里口 晴子 昭和女子大 昭和女子

2002年 平成14年

志摩 陽子 東京女子大
神奈川県外語短大附

2003年 平成15年

小沢 真理子 法 Northern Highlands
Regional
須藤 佳奈実 東京女子医大 山手学院

2008年度ア式蹴球部員

2005年 平成17年

大沢 拓巳	法	浦和
小蘭 健太	農	海城
齋藤 信	工	盛岡第一
鈴木 亮平	工	麻布
高橋 信行	工	岐阜
高松 敏	経済	巣鴨
千布 勇氣	理	佐賀西
中川 隆	工	巣鴨
中島 悠司	法	桐蔭学園
中野 誠	教育	盛岡第一
那須 雄介	理	私立城北
西 健吾	工	海城
船本 洋平	文	巣鴨
水澤 仁雅	工	私立城北
南 哲	理	開成

2006年 平成18年

熱海 修平	文Ⅱ	筑波大附駒場
岩田 宗一郎	文Ⅰ	洛南
後藤 遷也	文	長岡
高木 駿平	経済	筑波大附
深田 啓介	工	日比谷
藤安 雄治	工	横浜緑ヶ丘
南田 遼太	農	筑波大附駒場
村上 達哉	法	土浦第一
望月 進司	法	Arcadia
吉田 航太朗	工	弘学館

2007年 平成19年

江連 豪	文Ⅲ	開成
大内 三千生	理Ⅱ	麻布
乙村 浩太郎	理Ⅱ	熊本
久木田 紳吾	理Ⅱ	熊本
佐藤 裕人	理Ⅱ	筑波大附駒場
白井 英介	文Ⅱ	開成
田島 史也	文Ⅱ	八戸
藤井 丈生	理Ⅱ	徳山
松谷 康平	理Ⅰ	浅野

2008年 平成20年

太田 圭亮	理Ⅰ	麻布
加賀田 俊将	文Ⅰ	暁星
久保 雅史	文Ⅱ	麻布
鈴木 康平	文Ⅰ	八千代
道喜 開視	理Ⅰ	江戸川学園取手
野中 尚輝	理Ⅰ	韭崎
蒔田 祐貴	文Ⅱ	開成
松本 一起	文Ⅱ	海城
三浦 良介	文Ⅰ	栄光学園
宮川 啓輝	理Ⅰ	麻布
森元 規裕	文Ⅲ	海城

●女子マネージャー

2005年 平成17年

木本 宏美 上智大 神奈川県外語短大附
野呂 順子 お茶の水女子大 大宮

2006年 平成18年

小林 由佳 日本女子大 甲府東
櫻井 優里 日本女子大 和洋国府台女子
辻目 佑子 日本女子大 日本女子大附

2007年 平成19年

高木 美帆 お茶の水女子大 四日市
藤村 美穂 立教大短期大学部
国学院久我山

2008年 平成20年

石川 蘭 白百合女子大
聖ドミニコ学園
市来 麻友子 文Ⅲ 学芸大附

●アシスタント・トレーナー

2006年 平成18年

半田 奈緒子 文 土浦第一

2007年 平成19年

小蒲 彩子 お茶の水女子大
カリタス女子
丸井 由貴 学習院女子大
宇都宮短大附

2008年 平成20年

溝端 一美 白百合女子大
湘南白百合学園

2008年11月1日時点のL B会員およびア式蹴球部在籍者を掲載した

従来のL B会名簿の卒業年次別構成を入学年次別構成に改めた

記載項目は以下のものに限定した

入学年次

氏名 学部 出身校

編集後記

新しい事実の発見

これまで何冊か著書を出したことはあったが、原稿を書いて図表と写真を渡せば、後は出版社のほうでやってくれて、校正できれば本ができて印税もいただけた。それが今回は、編集作業にまで関わったので、本を作るまでの作業の大変なことを身をもって体験できた。文章を書くことには多少自信があったのだが、新聞社で鍛えた同僚の折原、牛木氏にちょっと直してもらうと、ぐっと読みやすくなるので、その面でも勉強になった。それと、学生時代にもほとんど行かなかった図書館に日参して古い資料に当たったが、新しい事実の発見の場となって楽しいものだった。時間の制約と努力の足りなさから、発掘できなかった部分がかなり残されているので、100年までにはもう少し空白を埋めたいとは思っているが、いつこちらがギブアップならぬタイムアップになるか、それが問題だ。(浅見俊雄)

カンカンガクガク

神田の学士会館の場所は知らなかった。記念誌を作るということで初めて出かけていき、編集委員を頼まれた。昔の仲間が多く、初めて知り合う後輩諸兄も何人かいて楽しく過ごさせてもらった。カンカンガクガクという字は書けないけれど、それこそガクガクとやらせてもらった。腰痛持ちなので腰をガクガクさせながら通ったが、一仕事終えて、夜、そば屋へ行ってイッパイやったとき、みんなでガクガクとやる話は全部サッカーのことで楽しかった。学の殿堂に通うことだし、近所は本屋街だから、硬い本の一冊も買って学を深めるべきだったろうが、元々ガクガクの頭だし、原稿読みが忙しいことを口実に努力をしなかったのが、知識向上の方はガクン。(折原一雄)

印刷メディアは貴重だ

ネット・メディア時代ではあるが、歴史は印刷メディアに残すべきだと痛感した。5号まで発行されている東大サッカー部誌「闘魂」が非常に役立った。新田純興さん、野津謙さんが生前に書かれた「思い出」は貴重な資料である。過去に「闘魂」編集に苦勞された安達二郎さんと原靖二郎さんたちの大きな功績である。「闘魂」を毎年発行して、自分たちの「現在」を未来に残してほしいものだと思う。(牛木素吉郎)

100年史への宿題

以下の項目は記事作成が間に合わなかった。10年後の100年史への懸案と考える。

①選抜チーム出場記録

「関東選抜」、「学生選抜」などに選ばれた東大関係者の出場記録を作成した。100年史の機会に利用されたい。

②OBチームの試合記録

「東大LB」以外のOBチームとして、昭和38年以降の「御殿下クラブ」、平成6年以降の「チームDiego」が東京都社会人リーグに参加している。また平成元年以降の「東大LB60」や「東大LB50」のシニア年齢OBの活動もある。これらも記録しておきたい。

③田村先生の文化勲章受賞

昭和31年に監督として指導していただいた農学部田村先生は文化勲章を受賞されている。監督・部長としての貢献のほかに、先生の研究業績を紹介する必要がある。(山本 修)

感謝しています

私が東大サッカー部に入ったその年の秋に、それまで一度も経験したことなかった関東大学リーグの1部から陥落したのだから、その後の3年間は1部復帰の念願に押しつぶされるような3年間であった。伸び伸びと大学サッカー部の生活をエンジョイする雰囲気ではなかった。悲壮感と言っても言い過ぎではなかった。そんな中で最初にキャプテンになられた五十嵐さんが赤門の前でタクシーに跳ねられて亡くなられた。本当にショックだった。苦難の3年間だった。だけど今にして思うと、感謝の気持ちしか思い当たらない。東大サッカー90年誌にいささかの関与が出来たことを幸せと思いたい。

(小山富士夫)

一貫した闘魂

いったい誰が編集委員なのか、私は本当に編集委員なのかどうか？もよく分からぬまま、6月頃から学士会館の地下室に通い始め、主としてパソコンを相手に朱入り原稿の校正作業に携わりました。一部の編集委員の志の高さにはただ驚くばかりで、私にできる仕事はその程度のものでした。幸いに42年卒の小柳さんが面倒な仕事を快く手伝ってくれたためどうにか頑張れました。おかげでお世話になった東大サッカー部にほんの少しでも恩返しができる機会が持てたと思っています。90年の歴史を通読して分かるのは「東大サッカーの歴史を汚さぬように」と言う一貫した「闘魂」です。東大サッカー部員のこの悲劇的なまでの使命感、これぞ伝統と深く感じ入りました。(安達二郎)

一生の宝

先輩の樋口周嘉さんから東大サッカー90年誌の編集に参加して欲しいとお話があり、管理・会計担当としてお手伝いした。現役時代は選手として勝利に貢献出来ず、卒業後は後輩達に何らの支援もできずにいたので、懐かしい思い出と素晴らしい友人を作ってくれたア式蹴球部に、この作業を通じていささかかなりともお返しをしたいと思った次第である。

41年卒業のサッカー仲間は、今でも夫婦一緒に2年に1回の旅行を楽しんでいる。今年は平田主将の肝入りで

広島、山口、福岡。この記念誌が、皆さんの一生の宝をより豊かにする一助になることを期待している。

(武田勝年)

東大サッカーのDNA

東大サッカー部の歴史は、個人の細い糸を4年間の同志と撚り合わせた紐にして、それを前後の年度の紐と撚り合わせ、さらに先輩からつながる紐に撚り合わせて太い綱にしたようなものだ。綱はあたかも遺伝子の立体構造モデルのようにらせん状でとぐろを巻いている。ある方向から見れば、毎年同じことを繰り返している。ある方向から見れば着実に進化している。そして綱の中心にあるもの(DNA)は闘魂ということであろうか。

(手島直幸)

伝統の重さ

日本のサッカーの黎明期、東大の黄金時代、大学紛争、そして現在と、様々な歴史の勉強をさせていただいた。諸先輩からは、「肉声」で伝統の重さも伝えていただいた。痛感したのが、大学サッカーの置かれた位置の変化だった。「賢者は歴史に学ぶ」と言う。明らかにサッカー人口が激増した環境の中で、これから東大サッカーは何を目指すべきか。フルタイムでお手伝いできなかったことを反省しつつ、そんなことを考えている。

(岡田滋行)

あいまいな記憶と記録

90年誌の編集作業に参画して感じたこと

- ・人の記憶は実に曖昧であること
- ・文書として残っている記録が必ずしも正しい訳ではないこと
- ・ア式蹴球部およびLB会の記録、文書の保管体制が不十分であったこと
- ・4年生の時のチーム運営が成績に与える影響が大きいこと
- ・選手層が薄いため、故障者が出ると著しく影響を受けた年代が多いこと

現在および将来のア式蹴球部員が90年誌の好例、悪例を目にして、自分たちの部の運営の参考にしていただければ幸いである。併せて、記録の重要性を認識し、自分たちの活動の記録を正確に残すよう努めて欲しいと思う。

(吉野元章)

練習日誌から

現役時代にお預かりした先輩の練習日誌が、思いもかけず手元に残っていたことが運のつき、編集委員会に文字通り引きずり込まれました。半年あまり、週末や休みの殆どを費やす破目となり、少年サッカーの指導や自分のゲームとの調整に苦労しました。主として昭和30年代以降の記録収集を担当しましたが、関東2部降格後は新聞報道も無きに等しく、自らの手で記録を残しておく必要を痛感しました。この思いを如何に多くの方に共有してもらうか、行方不明のスコアブックの発見、サッカーの底辺が急速に拡大した平成期の活動記録の残し方

等々、90年誌刊行では終わらぬ課題を残しつつ、ひと区切りにはホッとしているはずです。

(佐藤敦郎)

極東大会執筆

今回この極東オリンピックというどなたも直接の記憶はないに等しい時代のア式蹴球部の大先輩のことを書かせていただくことになり、旧字が読めないという単純なところから、時代背景が見えないというところまで多くの戸惑いがありました。しかし浅見さんを筆頭に諸先輩方のお力を借りまして、無事書き上げることが出来たことを心より感謝いたします。そして、改めて多くの偉大な先輩たちの歴史があるからこそ、私たちが4年間サッカーに打ち込めたことを認識し、そのつながりを嬉しく思うとともに、後輩たちにも伝えていければと思います。

(五十嵐朝青)

歴史と未来

何気なく引き受けた編集委員の仕事でしたが、多くの大先輩とお話する機会を持つとともに、「闘魂」や年代誌を通して様々な先輩方のサッカーにかける思いに触れることができました。いつの時代も皆さん、「闘魂」を注入してボールを追いかけていたんですね。今いわゆる超OBの方々がいきいきと編集委員の仕事をごこなすのも、それぞれの「4年間」、そしてサッカーに対する強い思い入れからだと思います。そんな「4年間」が積み重なって今のア式蹴球部があり、そしてこれからもまた、そこに様々な4年間が刻み込まれていく。そんな積み重なりの上に「夢」とか「悲願」が開いた時、この90年誌もまた新たな意味を持つのかもかもしれません。後輩達の4年間に幸多きことを願って。4年間ご支援ありがとうございました。

(小蘭健太)

部への貢献

我が東大ア式蹴球部にとって最大の美德は「部への貢献」である、と私は日々感じておりました。それはピッチ上でのプレーでもピッチ外での仕事でも何でもよい。形はどうあれ部へ少しでも貢献することこそが部員の存在価値となるのです。厳しい練習や忙しい研究生生活の中にあって現役部員である私を部誌編集へと駆り立てたのは、部へ貢献したいという「ア式蹴球部」への忠誠心そのものであったと改めて感じました。また、下手な文章、締切間際の寄稿と迷惑をかけっぱなしであった私を温かく見守って下さった編集委員先輩諸氏にはこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。

(那須雄介)

歴史を大切に

思いがけず歴史の1ページに携わらせていただき、とても贅沢な時間を過ごさせていただきました。物事にはすべて歴史があるということは知っているつもりでしたが、今回の経験でそれを実感することが出来ましたし、人から話を聞いてそれを残すということの大切さも実感しました。また、どこかでこの経験を役立てたいです。歴史を大切に、これから先も東京大学ア式蹴球部を応援していきたいです。

(近藤誌月)

[資料提供] (順不同)

京都大学OB会
一橋大学西松会
関東大学サッカー連盟
東京都大学サッカー連盟
東京大学情報学環・学際情報学府
東京大学総合図書館
財団法人東京大学運動会
秩父宮記念スポーツ図書館
朝日新聞社
読売新聞社
ベースボール・マガジン社
日本サッカーミュージアム
新田純弘

[写真提供]

秩父宮記念スポーツ図書館
朝日新聞社
ベースボール・マガジン社
日本サッカーミュージアム
スタジオ・アウパ
篠島春枝
新田純弘
賀川 浩
東大LB会

以下の方々には出版に際し、ご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

故 篠島秀雄 (昭和6年卒) ご令室
篠島春枝
東京高校・北海道大学OB
瀬藤進一
LB会員
須賀敏孝 (昭和19年卒)
片山義朗 (昭和31年卒)
高田宗昌 (昭和34年卒)
梅村 洋 (昭和38年卒)
小川 肇 (昭和39年卒)
後藤雅治 (昭和39年卒)
畔柳信雄 (昭和40年卒)
野村晋作 (昭和41年卒)
小西敏夫 (昭和43年卒)
永峰富一 (昭和44年卒)
武田 厚 (昭和45年卒)
田代康之 (昭和45年卒)
(敬称略)

東京大学のサッカー 闘魂90年の軌跡

発行 2008年12月19日

発行者 浅見俊雄

発行所 一般社団法人 東大LB会
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学運動会内

表紙 藤沼佳世

題字 須賀敏孝

版画 小川 肇

(題字・版画ともに「闘魂」創刊号より採録)

印刷 新津印刷株式会社

製本 株式会社DNP製本

制作著作 一般社団法人 東大LB会
東京大学運動会ア式蹴球部

編集委員 浅見俊雄 (昭和31年卒) 委員長
折原一雄 (昭和31年卒)
牛木素吉郎 (昭和31年卒)
山本 修 (昭和32年卒)
小山富士夫 (昭和35年卒)
安達二郎 (昭和39年卒)
武田勝年 (昭和41年卒) 会計
手島直幸 (昭和47年卒) 幹事
岡田滋行 (昭和49年卒)
吉野元章 (昭和54年卒)
佐藤敦郎 (昭和55年卒)
五十嵐朝青 (平成13年卒)
那須雄介 (現役4年)
小藺健太 (現役4年)
近藤誌月 (ビバ!サッカー)

制作協力 株式会社インターブックス

©Light Blue Football Club, 2008
Printed in Japan
非売品
無断転載を禁ず



神谷町で会計事務所を開設しております。
お近くにお越しの際は、ぜひご連絡ください。

金子公認会計士事務所

〒105-0001 港区虎ノ門5-12-1 虎ノ門ワイコービル5階
公認会計士・税理士 金子健紀(かねこたけのり)
TEL : 03-5401-2423 FAX : 03-5401-2424
mail : cpa-kaneko@pop01.odn.ne.jp

現職／日本公認会計士協会租税調査会法人課税専門部会専門委員、
同協会東京会業務部常任幹事、
日本公認会計士協会東京実務補習所講師
前職／同協会東京実務補習所運営委員、同協会東京会港会副会長

ア式蹴球部の発展を!

大学というよりも、ア式蹴球部を卒業して20年。また会社勤めから会計士の道へ足を踏み入れて15年になります。その間、当然のことながら山あり谷ありではありましたが、自分の拠り所はいつも、あの時の練習にあったと痛感しています。自分を鍛えてくれたあの4年間で、今の自分を支えています。

現在、私は自分の信じる道で自分なりに精一杯頑張っています。

ア式蹴球部のますますの発展を祈念してやみません。



THE POSSIBILITIES ARE INFINITE **FUJITSU**



FMV
DESKPOWER / BIBLO

会社設立・決算申告・確定申告・相続など
お気軽にご相談ください。

堀井会計事務所

公認会計士
税理士

堀井 茂

昭和 51 年卒
horiikaikei@nifty.com

〒144-0051 東京都大田区西蒲田 6-9-4 ☎03-3732-4341

杉浦医院 小児科・内科

院長 杉浦 裕

ア式蹴球部卒業 昭和 51 年
医学部卒業 昭和 53 年

■診療時間

	午前	午後
月～木	9:00～12:30	17:00～20:00
金	9:00～12:30	休診
土	9:00～12:30	17:00～19:00

■休診日 日曜・祝日

〒466-0815

名古屋市昭和区山手通り
5-33-1

電話 052-832-1063

Fax 052-832-1090